IS Fate extra

赤弓

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＩＳ　Ｆａｔｅ　ｅｘｔｒａ

【Ｎコード】
Ｎ９１１４Ｖ

【作者名】
赤弓

【あらすじ】
世界で唯一ＩＳを動かせる男　織斑一夏　ある日、彼の目の前にキャスターと名乗る少女が現れた　聖杯戦争・・・新たな運命が今、始まる

少年と狐の始まり

「なん・・・だと・・・・？」

突然だが、自己紹介を始めよう
俺の名前は織斑一夏。世界で唯一ＩＳを動かせる以外は極普通の高校生だ
もう一度言おう。ＩＳを動かせる以外は普通の高校生のはずなのだ

ラウラと和解してから数日後、今日はＩＳ学園が休みの日曜日
本当はいつものメンバーで訓練の筈だったのだが、逃げ出してしまった
・・・だって先週も先々週も訓練だったから、たまには・・・なぁ

そこで、俺はちょっと学園の外へ買い物に出て
適当にぶらぶらしてから久しぶりに家の掃除をやろうと家に帰ってきたわけですよ

それで千冬姉の部屋を掃除中・・・
あやまってガラスの箱に入っている石を落としてしまったのだ
・・・マズイ、ばれたら絶対怒られる
慌てて戻そうとしてその石に触れたら何故か、右腕に激痛が走った

そして痛みが消えると目の前には狐耳と尻尾をつけた巫女姿の女の子が！！
確認のため・・・もう一度、あえて言おう

「なん・・・だと・・・・？」

・・・って、何だこれぇぇぇぇぇぇ！？
何で女の子！？何で獣耳！？何故に巫女の衣装！？
ヤバイ、ヤバイヤバイヤバイ！！！！もし千冬姉に見つかったら・・・死！！！！
落ち着け俺・・・とにかく証拠隠ｍ「あの～」

「へっ？」

突然かけられた声に驚いて振り向くと、先程の女の子が話しかけてきていた

「始めまして、ご主人様
私はキャスター。真名は玉藻の前、白面金毛九尾の狐でございます」

「・・・・・・」

「ご主人様？」

ピッ、ポッ、パッ

「あ、もしもし警察ですか？今おｒ「ご主人さまぁぁぁぁっ！？」
何ですか！？俺は電波な人に知り合いはいません！！てかご主人様って！？」

女の子が叫ぶが俺は気にせずに警察に電話をかけようとする
・・のだが、受話器が無い？

「もうご主人様ったら・・・人の話は聞かなきゃ駄目ですよ？」

そういう女の子の手には俺が先程まで持っていた受話器が握られていた

ー　数十分後

「・・・で？君はいったい何なんだ？
炎を出したり、瞬間移動したり、あげく俺をご主人様と呼んだり」

あれから俺は様々な手を使ってこの女の子から逃げようとしただけどその度に炎や瞬間移動を使って防がれてしまい、今は座って話し合いをしている

「先程の炎などは私の使う魔術によるもの
ご主人様と呼ぶのは私が貴方のサーヴァントですから♪」

「いや、意味がわからないんだけど
そもそも魔術とかサーヴァントって何？」

俺がそう言うと目の前の女の子は驚いたような顔で俺を見る
・・・なにか変な事を言ったのだろうか？いや、特に何もまずい事は言ってないはず

「ご、ご主人様？ひょっとして聖杯戦争・・・いえ、魔術すら知らないのですか？」

「おう、知らん」

「わ、わかりました・・・順をおって説明します」

※キャスター説明中

「・・・つまり、俺はイレギュラーで君を召喚してその戦争に巻き込まれたと？」

キャスターから聞いた話は驚きの連続だった。サーヴァントと呼ばれる英霊の存在
7人のマスターとサーヴァントで行われる戦争のこと
・・・全く持って馬鹿げてる、この世界の裏でそんな殺し合いが行われているなんて

その中で俺はＩＳの事をキャスターに話してみた
サーヴァントといえど元は人間なのだから、ＩＳを使えば勝てるのではないかと
しかし、キャスターから帰ってきたものは完全な否定だった

「確かにその　あいえす　というものは強力な兵器のようです
ですが、乗っている者が人間である以上サーヴァントには絶対に敵わない
いいですか、ご主人様。絶対にサーヴァントと戦おうと思ってはなりません」

「・・・わかったよ、ところでキャスターはこれからどうするんだ？
俺は今からＩＳ学園・・・俺の通ってる学校に戻らなきゃいけないんだけど」

「当然、私もついていきます」

即答だった。しかしそれはまずい
訓練をすっぽかして外に出てきて、挙句女の子を連れ帰ったとなれば・・・殺される
誰にとは言わないが・・・絶対に殺される

「で、でもなキャスター？
流石にその格好は目立つし、ＩＳ学園も関係者以外は入れないしでキツイかと・・・」

「あら、問題はありませんよ？ご主人様」

キャスターはそういうとスゥ・・・ッと音をたてずに消えた

「お、おおおおい！！キャスター！？」

「呼びましたか？」

「どわぁぁっ！？」

混乱したところにいきなり後ろから声をかけられた俺は盛大にひっくり返った

「だ、大丈夫ですか！？ご主人様！！」

「・・・何とか、ところで今のは？」

「霊体化です。これで他の人には見えませんし
私の声もご主人様にしか聞こえませんから、ずっと一緒ですね♪」

嬉しそうに告げるキャスターに俺は苦笑いを返す
そして、これからの事をどうするか考えながら俺はＩＳ学園へと戻るのだった
・・・あれ？なにか忘れてるような・・・

学園で訓練をすっぽかされた乙女という名の鬼が５人、待ち構えている事を彼は知らない

少年と狐の始まり（後書き）

どうも赤弓です
駄文＋亀更新ですがよろしくお願いします
あと、作者のＩＳの原作知識はアニメとｓｓのみなので
かなり高確率でオリ展開となりますがご了承ください

狐と少年　ＩＳ学園へ

（なぁ・・・キャスター）

ＩＳ学園へと戻る電車の中、俺は頭の中でキャスターに向かって話しかける

（何ですか？ご主人様
ひょっとして私の姿が見えなくて寂しかったんですか？」

嬉しそうにそういうキャスターに俺は小さくため息を吐く

（いや、これからのことなんだけどさ・・・
他のマスターやサーヴァントの情報は何も無い
いったいどうすりゃいいんだ？）

（そうですね～、とりあえずご主人様にはいつもどおり過ごしていただいて・・・
私は向こうに着いたらご主人様に近づく敵を感知する結界を学園に張っておきます）

（助かる。流石に千冬姉たちは巻き込みたくないしな・・・）

「次は、ＩＳ学園前～、ＩＳ学園前～」

「もう着いたのか・・・」（降りるぞ、キャスター）

（了解です）

電車から降りた俺は真っ直ぐへと寮に向かう・・・のだが、その途中で箒たちに捕まった

「さて一夏？説明してもらおう」

「何故、わたくし達との訓練を放棄して・・・」

「勝手にどっかいっていたのか話してもらうわよ」

「一夏、僕も訳を聞きたいな」

「おとなしく吐いた方が身のためだぞ、嫁よ」

5人とも青筋を浮かべながら迫るのはやめてくれ。怖いから

（モテモテですね、ご主人様。流石イケメン魂の持ち主です♪）

（どこがだ！！コレの！！全員怒ってんじゃねぇか！）

その後も起こられ続ける俺をよそにキャスターは隣で

（鈍いですね・・・ここは私が積極的に・・）

とか呟いていた。・・・いったい何が鈍いんだろう？

かくして5人の説教が終わり、ようやく開放された俺は自分の部屋のベッドへとダイブした

「ぬおお・・・・ベッドが気持ちいいぜぇ・・・・」

「お疲れ様です。ご主人様」

キャスターも俺の部屋の中では実体化し、隣のベッドに腰をかけている

・・・あれ？何だろう、やけに眠い・・・

「今はよくお休みになってください
ただでさえ、私の召喚で消耗しているのですか・・・」

「・・・そうする・・・あ・・誰かがもし部屋に入ってきたら・・・」

「鍵をかけておきますから大丈夫です
もし鍵を突破されたら私は霊体化しておきますし」

なら大丈夫か・・・

「ごめん、あとはまかせた・・・おやすみ・・・・」

「おやすみなさい、ご主人様」

キャスターのその声を最後に、俺は静かに眠りについた

「ご主人様・・・？」

「・・・・・・・」

「フフッ、もうお眠りですか？」

私はそういいながら今日、私のマスターとなった少年の頬をつつくこうしてみるとなかなかイケメンですね・・・ジュルッ、あらあら涎が・・・

さて、ドアに鍵をかけてその上に結界を張って・・・と
防音、攻撃遮断、防臭などいろいろ得点付きの特性結界です
ま、明日の朝にご主人様か私が中からドアを開ければ解除されますけどね～
これでご主人様も安らかにお休みになれるはず。ああ、私はなんて良妻狐なんでしょう

「これでいいですね。じゃあ、おやすみなさい～」

私はそのままご主人様の隣で眠りに着いた

ー　翌日、早朝

『ドガアァァァァァ！！！！！！！！！！』

「な、ななな何！？いったいどうしたの！！敵襲！？」

寮中に響き渡るような爆発音で僕、シャルロット・デュノアはベッドから飛び起きた
辺りを見回すといつのまにかルームメイトであるラウラの姿が無いまた、一夏の部屋へといっているのだろうか・・・ってそうじゃなくて！！
僕はそのまま近くにあったジャージに着替え、いつでも動けるようにする

そして数秒後、勢いよく自室の扉が開けられた

「シャルロット！！起きろ、シャルロット！！」

「ど、どうしたの？ラウラ・・・」

するとそこには焦った顔をした半泣きのルームメイトがいた

「ど、どうしたではない！！大変なのだ
私がいつもどおり嫁の部屋へ行き、添い寝をしようとしたのだが・・・」

「一夏と添い寝ってのは許容できないけど・・・それでどうしたの？」

「ドアが開かないんだ！！！！」

「はい？」

ドアが開かないって・・・それだけ？

「それなら鍵がかかってるんじゃ・・・」

「私はちゃんとピッキングした！！完璧だ！！！！」

・・・威張っていうことじゃないよ、ラウラ

「それなのに開かないのだ！！あの忌々しいドアが！！！！
私と嫁との夫婦生活をたばかるあのドアが！！あの忌々しいドアが！！！！」

「・・・大事な事だから2回言ったんだね
それでその忌々しいドアをいったいどうしたの？」

「ＩＳを展開してレールカノンで破壊を試みた」

「・・・じゃあ、さっきの轟音はラウラのせいか
ところで後頭部のそのたんこぶはひょっとして・・・」

「教官に殴られたっ！！」

「・・・当然だと思うよ？」

（レールカノンをぶっ放したら中にいる一夏は無事なのかな）

・・・と心配していた僕は間違ってない。決して間違ってはいないはずだ

だから次のラウラの言葉を聞いて僕は本当に驚いたんだ

「それでも壊れなかったんだ！！あのドアは！！」

「・・・なんで？」

「それを教官に説明したら教官も不思議に思い、教員のマスターキーを使用した

だが、それでも開かない。あげく集まった全員で破壊を試みたが傷一つ付かないのだ」

その言葉が信じられなかった僕は、部屋をでてラウラと一緒に一夏の部屋の前へと向かう

するとそこには寮の生徒や、織斑先生など大勢の人がドアを開けようとしていた

「ぐっ・・・何故、開かん！！」

「先生、どいてください！！こうなったら甲龍の衝撃砲で！！」

「しょうがあるまい・・・許可する！！全力で放てぇぇぇぇぇぇ！！！！！」

・・・うわぁ、すごいことになってる

織斑先生も一夏が心配なのだろうか、何が何でもドアを破壊しようとしてるし

そう思っていると、衝撃砲が放たれドアへと着弾しその余波で体が吹き飛びそうになる

だが、煙が晴れるとそこには傷一つ付いてないドアがたたずんでいた

「もう、何なのよ！？このドアはぁぁぁぁ！！」

「聞こえるか！？私だ、千冬だ！！聞こえたら返事をしてくれっ、一夏ぁっ！！！！」

鈴が叫び、織斑先生はドアを叩いて必死に一夏へと呼びかける
だが、一夏からの返事は無い。ひょっとして一夏になにかあったんじゃ・・・
そう考えたらいてもたってもいられなくなった

「うわぁぁぁぁぁぁっ！！！！」

「一夏！？どうした！！一夏ぁっ！！！！」

突然、一夏の悲鳴が聞こえた

「一夏っ！？」

「一夏さん！！大丈夫ですか！？一夏さん！！」

その言葉に全員顔を青くしながらも必死に叫び続ける
・・・お願い、一夏・・・無事でいて・・・

ー　その頃、一夏の部屋の中

「ん、むぅ・・・もう朝か・・・」

いつもどおりの朝、今日は少し早く起きたな・・・と思いつつ
俺はベッドに手をついて起き上がろうとしｔ―　ムニュッ・・・ムニュ？

「もう・・・ご主人様ってば・・・朝からダ・イ・タ・ン♪」

「うわぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！！！」

何で！？何で隣に知らない女の子が！？・・・そういえば昨日・・・

「思い出しましたか？ご主人様」

「ごめん、まだ混乱してる・・・キャスター・・・だよな」

「はい、クラスはキャスター、真名は玉藻の前
ご主人様に呼び出され、良妻狐のデリバリーにまいりました」

俺は昨日の出来事を思い出し、ため息を吐く

「わかった、全部思い出したけど・・・
なんでキャスターが俺の隣で寝てるんだ？」

「それは良妻狐なんですから、添い寝を・・と」

「やらないでいいから、本当に心臓に悪いから」

イケズ・・・と呟くキャスターを背に俺はジャージに着替える

「ご主人様？いったいどちらへ？」

「早く起きすぎたからな。ちょっとジョギングだよ」

「私も付いていきます。ご主人様をお守りしなきゃいけませんし」

「だ、大丈夫だよ！！だからキャスターはここで待っててくれ、絶対！！」

冗談じゃない！！万が一、誰かに見られたら・・・・まずい事になる、確実に！！

「しょうがありませんね・・・ではここでお待ちしています
なにかあったら念話、もしもの時は令呪をつかって呼び出すよう」

「了解・・・」

ベッドに座るキャスターを背に俺はドアへと向かう。そして俺はドアノブへと手をかけた

・・・今思えば、俺は何故この時点でキャスターを霊体化させていなかったのだろう
悔やんでも悔やみきれないこの失態に気づかぬまま、俺は地獄へと続く扉を開いたのだった

騒乱　一夏包囲網

「さて・・・いったいどれぐらい走ろうｋ・・・」

そう言いながらドアを開けた瞬間、俺は完璧にフリーズした
今の時刻は午前４時半ぐらい、普通なら起きている人は少ないはずである

だがしかし、俺の部屋の前には半泣きになっている千冬姉や箒たち
それにクラスの皆
・・・なんだこの状況は

そして集まっていた皆は部屋から出てきた俺の姿を見た瞬間、一斉に泣き出してしまった

「えええええ！！ど、どうしたんだ千冬姉！？それに皆も！！」

「一夏・・・無事でよかった。お前に何かあったら私は・・・」

その千冬姉の言葉につられるように周りの皆が目尻の涙を拭きながら優しく微笑んだ
そして廊下にとても優しい空気が流れる中・・・

「ご主人様？いったいドアを開けたまま何をなさっｔ・・・・」

部屋の中から俺に話しかけるその声が完膚なきまでに空気を破壊した

「「あ・・・・・・」」

俺とキャスターの声が重なる、他の皆は時が止まったように固まっている

まぁ、待て。ひとまず皆から見た今の俺の状況を整理しよう

ＩＳ学園の関係者でも無い女の子を自分の部屋に連れ込んだ

ちなみに起きた時の事件で、キャスターの服は少しはだけている

見た事もない獣耳、尻尾がついた女の子にご主人様と呼ばせている

・・・よし、何かとんでもない状況なのだけは理解できた

とりあえず俺はそのままゆっくりとドアを閉めるとすぐに反転する

そして窓に向かいながらキャスターに話しかける

「キャスター、窓から飛び降りるの補助できる？」

「は、はいっ。その程度ならばお安い御用です」

その言葉に俺はそうか・・・と呟くと手にした靴を履き

キャスターの補助のもと、窓から飛び降りて近くの地面へと着地した

・・・その瞬間

『ドガァァァァァァァァ！！！！バキバキッ！！！グシャアッ！！！！』

元の原型がドアだった物だろうか？

粉々になったその残骸が窓を突き破り頭上から降ってくる中、俺の頭は酷く冷静だった

いつだって人は自分にできる事に必死になればいい

そして、今の俺にできる唯一の選択肢・・・それは！！

「力の限り、逃げ続けろぉぉぉぉぉっ！！！！！」

「待ってください、ご主人様～！！」

ー　ＳＩＤＥ　千冬　ー

「全員であの愚弟を探しだせぇぇぇぇ！！！！！
捕まえたら半殺しにして構わん！！その後、私の所へ引きずって来い！！！！！」

『サーッ！！イエッサー！！！！！』

私の言葉にその場にいた全員が行動を開始する
・・・ククッ、一夏よ面白い事をするなぁ。私に散々心配させておいて・・・
その挙句の果てが見知らぬコスプレ女を無断で寮に連れ込んでいただぁ？

一夏ァ・・・・覚悟しろよ・・・？

ー　ゾワッ

「・・・・・ッ！？」

（ど、どうしました！？ご主人様！！）

な、何だ！？寒気が・・・

今現在俺はキャスターに霊体化してもらい、更衣室のロッカーの中に隠れている

何故、こんなところに隠れているのかって？・・・それはな

「一夏ぁ～、どこぉ～、今なら半殺しの拷問付きで許してあげるからぁ～」

ハイライトの無い瞳で幽鬼のように徘徊するセカンド幼馴染がいるわけですよ

ところで鈴、多分それは許している部類に入らないだろ？と思った

俺は正常なはずだ

（それよりご主人様、これからいったいどうなさるおつもりで？ここにずっと隠れていてもいずれは誰かに見つかっちゃいますよ）

（わかってる・・・なんとか鈴の目を盗んでその隙に！！）

「「「「「い～ち～か～（さ～ん～）」」」」」

なんか増えてるぅぅぅぅぅぅ！？

くそうっ！！いつのまにか箒にセシリア、シャルとラウラまで・・・

・・・くっ、こうなったら

（何かいい魔術は無いの！？助けてたまえもん！！）

（ご主人様・・・何気に少し馬鹿にしていませんか？）

（いや、だってもう逃げ場ないよ、地獄への片道切符だよ！？）

（すごく混乱されていることはわかりましたから少し落ち着いてください

・・・そうだ！もういっその事、堂々と出て行って

朝の事については知らぬ存ぜぬで通したらどうでしょう？アリバイは私が作ります）

なるほど！！そんな手段が・・・って

（確かにいい手だけど・・・大丈夫なのか？アリバイって）

（先程逃げているときに学園の外の海で釣りをしていた人たちの記憶を改ざんします

そしてご主人様はその人たちと先程の時間は一緒にいたという事にすれば・・・）

（そうか！逃げ出した奴が堂々と出てくるのは普通じゃない！！

その上アリバイもあるとなれば疑いも晴れるはず・・・すごいぞキャスター！！）

（えへへ・・・ご主人様に褒められました）

「よし・・・そうと決まれば即実行！！」

俺は箒たちがロッカーの死角に入った瞬間、隣のシャワー室に駆け込んだ
そしてあたかも最初からそこにいて、偶然皆と出会ったかのように振舞うんだ！！

「おっ、箒たちじゃん♪何してんだ？こんな朝早くに」

俺が手を振りながら声をかけると、５人の顔が一斉にこちらを向くそして、その表情を見た瞬間に俺はこの作戦の欠点に気が付いたのだった

血に餓えた獣が捜し求めていた獲物を見つけた時、どういう行動をとるか
答えはそう・・・単純明快にしてたった一つの真実

見敵必殺（サーチ・アンド・デストロイ）

次の瞬間、目の前に広がった赤い光景を最後に俺の意識は闇へと沈んだ

新たな邂逅　もう1人のサーヴァント

「ふ～む、ご主人様は今頃どうなされているでしょうか・・・」

そんな事を呟きながら、現在私はＩＳ学園の屋上で結界を張る作業に勤しんでいる

一応、記憶を改ざんした人たちを向かわせましたけど・・・

それまでご主人様の命がもつのかが心配なのです

「ま、まぁご主人様なら大丈夫ですよね・・・

それより作業、作業・・・・っと。敵が侵入したら知らせるやつと、あとは・・・」

ご主人様の事を一時的に忘れ、結界の設置に専念しようとした私ですが

次の瞬間、後ろからサーヴァントの気配がすると同時に声をかけられました

「へぇ、こんな真っ昼間から陣地作りとは精が出るな？キャスター」

「・・・ッ！！」

声に反応し、後ろを振り向くとそこには赤い槍を携えた青い鎧の男が立っていました

「まさか、こんなに早く他のサーヴァントに会うとは思いませんでした

槍・・・ということはランサーのサーヴァント、私に何か御用でしょうか？」

「いや、マスターからの命令でな・・・
この学校の生徒に危害を加える奴を倒すのが俺の仕事だ」

「それならご心配なく、今から作る結界は外敵を察知するだけのものですので」

「そうか、それは残念だ。おかげで勝負できる奴が減っちまった
こっちは暴れたいのに・・・全くもって理解しがたい指示を出すマスターだよ」

ランサーを睨みつけながら話す私ですが、ふと、ランサーの言葉に違和感を覚えました
・・・妙ですね。今のランサーの言い分だとまるで学校の生徒に危害を加えないならばこちらから争いを仕掛ける気は無い・・・という事
まさか、ランサーのマスターは学校の関係者・・・？

「それはまた・・・貴方のマスターが学校にいると言っているようなものですよ？」

「ほざけ、お前もこんな所で結界を張ってるのは
自分のマスターがここにいるからだろうが。じゃなきゃ結界を張る意味がねぇ」

その言葉に私は軽く舌打ちをしながら、ランサーを見据えます
どうやら、本気で争う気は無いようです。まぁ、ここでドンパチやっては目立ちますから

・・・ご主人様、どうやらこの学園は色々と厄介になりそうです

ー　ＳＩＤＥ　一夏

「千冬姉、ホント正直に話してるから！！
マジで嘘ついてないよ！？ホントだよ！！」

「何をそんなに怯えてるんだ一夏・・・
お姉ちゃんはドイツ軍で実際に行われた拷問のビデオ（ダイジェスト版・ラウラ提供）
を流しながら、お前に優しくわかり易い質問をしているだけじゃないか・・・」

嘘だ！！目が笑ってない！！
てか千冬姉が自分をお姉ちゃんとか言うときは高確率でキレてるときだよね！？

「もう一度だけ言うぞ・・・あの女は誰だ？答えろ、一夏」

「な、なんのことかわかりまｓ「ザクッ」・・・・」

何とかとぼけようとした俺だが顔の真横に突き刺さった真剣によって動きが止まる

「一夏・・・頼む。お姉ちゃんをあまり怒らせるな・・・」

「ちょおおおおおっ！！誰か助けて！？マジで俺死ぬ！！殺されるぅぅぅぅ！！」

そして千冬姉の手が徐々に俺の頭へと・・・・

「お、織斑先生！！実は朝の織斑君のことですが・・・」

「何か分かったのか！！」

「いえ・・・今朝、学園の近くで釣りをやっていた人が
織斑君と４時ごろから連行されるまでの時間、話していたことが判明しました」

「何だと！？」

扉を開けて入ってきた山田先生の報告で俺の頭から千冬姉の手が離れる
よっしゃぁぁぁぁ！！キャスター・・・グッジョブ！！！！

「ほら、千冬姉！！俺は今日、偶々ジョギングしてたんだって！！
箒たちに会うまで部屋になんか戻ってないし、話すことも全然無い！！」

「ちっ・・・」

必死に弁明するとようやく千冬姉は俺を開放してくれました
でも最後、舌打ちしたような・・・・ウン、気のせいだなっ！
だが、この後の午前中の授業でクラスの皆からの視線が痛かったのは辛かった・・・

そして時は流れ、昼放課・・・
俺はキャスターと合流し、アリバイ作りに対してのお礼を言った
「いやいや、ご主人様のためなら・・・って、それどころじゃありませんでした!!」
「？何を焦ってるんだ、キャスター」
「ランサーのサーヴァントと遭遇したんです!!屋上で」
「なっ・・・!?」
まさかこんな早くに他のサーヴァントが現れるなんて・・・しかも学校で
「幸い戦闘にはなりませんでしたが、ご主人様に報告したい事が一つ・・・
ランサーのマスターはおそらくこの学園の関係者だと思われます」
「なっ・・・!?」
そのキャスターの言葉に俺は驚き、手の中の焼きそばパンが地面に落下する
「ですがご主人様、ランサーのマスターは学園に危害を加えるつもりは無いようです
それどころか学園の生徒を守るような指示をランサーに出していました」

「・・・なんだ、それならもしかしたら戦わずに済むってことか？」

「まだ油断はできませんが、その可能性は高いでしょう
ランサーのマスターとは時を見て同盟を結ぶのが吉と思われます」

ランサーのマスター・・・いったいどんな奴なんだろう？

ー　ＳＩＤＥ　？？？

「おい、一応報告しとくが屋上にサーヴァントがいやがったぜ。マスター」

「・・・！！・・・それで・・・？」

「特にこの学園に危害を加えるつもりは無さそうなんで放置しといた
あまり昼中から戦闘をしてっと一般人が巻き添えになりかねねぇからな」

その報告を聞いて、私はホッと胸を撫で下ろす
でもこの学校にサーヴァントが現れるなんて・・・

「そう・・・そのマスターは？誰なのか・・分かった？」

「いや、そこまではわからなかった
だけどコレだけは言える。アイツのマスターは確実に学校の中にいやがる」

学校関係者・・・もしかしたら自分と同じ生徒だろうか
話し合えば分かり合えるかも知れないし、失敗したら戦う事になるかもしれない
もし戦闘になっても他の人に頼ることはできない

私が聖杯戦争に参加していることはお姉ちゃんはおろか、お付きの親友だって知らない
不安が胸に渦巻く中、私は再び目の前の機体の調整を始めるのだった

オーシャンズ・イレブン　ＩＮ　狐

ＳＩＤＥ　キャスター

ランサーとの邂逅から数日後
現在、ご主人様は旅行用のカバンに自らの着替えをつめてらっしゃいます

「ご主人様、ご主人様
何故お着替えをカバンに入れてらっしゃるのです？
どこかへお出かけになるのですか？」

「ああ、キャスターは知らなかったか？
今日から俺達１年生は臨海学校だからな。それでだよ」

「り、臨海学校！？大変です！私、水着も何も用意してないですよ
何で教えてくれなかったんですかご主人様～！！」

「いや、キャスターは学校に残ると思って・・・」

「残るわけ無いじゃないですか！！
ご主人様が行くところに良妻狐あり！！必ず私も着いて行きます！！」

ご主人様はどうやら私を学校においていくつもりだったようです
うううう・・・ひどい、こんなにもご主人様の事を思っているのに・・・
・
このごろ思うのですが、どうやらご主人様は油断しすぎです

もしかしたら旅先でご主人様が敵のサーヴァントに襲われるかもしれないし
・・・やっぱり、ここは私がしっかりとご主人様をお守りしないといけません
愛しいご主人様を守るためなら私は・・・

「必ずお守りします、ご主人様・・・っていない！？」

慌てて窓から顔を出すと、そこにはカバンを持って歩いているご主人様が

「・・・・・・・ま、待ってくださいご主人様～！！」

SIDE　一夏

（ご主人様、なんで私をおいてくんですか！！）

（いや、だってもう集合時間ギリギリだし・・・）

（いいですか？サーヴァントたるもの
いつ何時も主の傍にいて主を守る。これは常識なんですからねっ！！）

（わかった、わかったから・・・・）

追いついてきたキャスターに文句を言われながら俺は集合場所へと向かう
だが、俺はふとあることに気がついた

（あれ？キャスター。ちょっと気になるんだけど・・・）

（何ですか？）

（それだとランサーも集合場所にいる可能性があるんじゃ・・・）

ランサーのマスターが学校関係者ということは
そのマスターも臨海学校に参加する可能性も少しはある訳だ

（・・・別々に集合場所に行ったほうがよさそうですね）

（そうだな、キャスターはバスに乗るのか？）

（そうですね、霊体化してご主人様とは違うバスに乗っておきます）

（ＯＫ、じゃあそれでいこう。向こうに着いたら合流で）

その後、キャスターと別れた俺は集合場所で１組のバスへと乗り込んだ

ー　２時間後　ＳＩＤＥ　キャスター

ただ今、ご主人様は水着に着替えクラスの方々たちと遊んでいらっしゃいます
・・・楽しそうです、本当に楽しそうです。さぞおもしろいのでしょう
私ですか？私は近くにある山からご主人様の事を見守っています
ホントはあそこに参加したいです！！でもランサーのこともありますし参加するのは・・

「そうです、ランサーだっていまごろどこに潜んでいるか・・・」

学校を出てからも近くにサーヴァントの気配を感じる以上
ランサーもこの臨海学校に来ているのでしょう
そうなるとランサーのマスターはご主人様と同じく1年生もしくは教員という事になります

私はそう思考しながら辺りを見回します
そうです、今頃ランサーは下は海パンで上にアロハを着て海へと向かって・・・

「はい？」

視界の端に移った光景が信じられなく、もう一度私はその場所を凝視します
するとそこには海パンとアロハをきたランサーが海へと歩いて行き・・・

「ランサァァァァ！？」

「お、キャスター。やっぱお前も来てたのか？」

思わず座っていた木から叫びながら飛び降りてしまいました
うう・・・はしたない・・・ってそれどころじゃありませんでした
！！

「な、何をしてるんですか貴方は！？
私が遊ぶの我慢して見張りをしてるというのにその夏満喫な格
好で！！」

「いや、あんなに綺麗な嬢ちゃんたちがいんだぜ？
ナンパするのが男ってモンだろうが！！」

ナンパ？いうにことかいてナンパと言いやがりましたか

「・・・呪詛・炎天」

「どうわぁっ！？いきなり何しやがる！！」

ちっ・・・外しましたか・・・

「次は・・・当てます・・・」

「ま、待て待て待て！！俺はお前と争うつもりはねぇ
そうだ、なら俺と一緒に行動しねぇか？それならお前も安心だ
ろ」

「は？何ですかそれは、ふざけてるんですか」

「よく考えろよ、それなら俺はナンパできる

お前は俺を見張れるし海で遊ぶ事も可能・・・完璧じゃねぇか！！」

「・・・・ッ！！」

そ・・・そんな方法が・・・

た、確かにそれならご主人様と遊べますし

「それに俺のマスターはお前らと同盟を組みたいそうでな

だからお前らに危害を加えるつもりは全くねぇよ

お前らだって俺達と協力関係になっておいた方が得だと思うが？」

「同盟についてはご主人様もお考えになってらっしゃいます

ですがそちらのマスターを知らない以上、それは受けかねます」

ランサーのマスターは思ったより、平和的なようです

しかしこの同盟が偽りでご主人様を探す罠という可能性も捨て切れません

「ならこうしよう、俺とマスターは今日の夜８時にここでお前らを待つ

同盟を受けるつもりならお前も自分のマスターをつれてここに来い」

「・・・わかりました。ですがもしその言が嘘だった場合は・・・」

「嘘じゃねぇよ。誓約（ゲッシュ）に誓ってな」

・・・どうやら本当のようですね
何とかして早くご主人様にこの事を報告しないと

「じゃ、俺はナンパに言ってくるから」

ランサーは爽やかにそう言い放つと真っ直ぐにビーチへと向かいました

「しょ、しょうがないですね・・・
ご主人様にこの事を早く報告しないといけませんし
ランサーも見張らなきゃいけないしで私も向かうべきですよねっ？」

そう呟き、私はランサーの後を追いかけるのでした

SIDE　一夏

「おりむ～っ」

「ん、どうしたんだ？のほほんさん」

ビーチバレーを見ながら現在、休憩中の俺にのほほんさんが話しかけてくる
その隣には眼鏡をかけた知らない女の子がいるが・・・他のクラスの子だろうか？

「ほ、本音・・・私はいいから・・・」

「何で～？かんちゃんもやろうよ～

ね～、おりむ～びーちばれーに参加してもいいよね～？」
「ああ、別に俺はかまわないぞ。皆もたぶん大歓迎だろうしな」
「ほら～、おりむ～もいいって～」
「うう・・・でも・・・」
のほほんさんが必死に眼鏡の子を説得してるが
眼鏡の子はあまり参加したくなさそうだ。運動が苦手なのかな？
ん？なにやら向こうの方が騒がしくなってきたな・・・
「ど、どなたですかっ？ここはＩＳ学園のプライベートビーチですよっ
それにウチの生徒達をナンパされてはこまりますっ！！」
「あ～、わりぃ。知らなかったんだよ　この辺ははじめて来たからな
それよりどうだい？この後、俺と一緒に飯でも食わねぇか？」
いったい何なんだと思って視線をそちらに移すと
山田先生が見た事もない青い髪のアロハシャツを着た男としゃべっていた
どうやらナンパされているようだ
「あの人、どうやってここまで来たんだ？
ここって確かプライベートビーチだったような・・・って
何でいきなり眼鏡の人が膝を突いて倒れるんだ！？」
「ど、どうしたの～っ！？」

「あれは幻、あれは幻、あれは幻・・・」

ひょっとして気分が悪くなったのだろうか、早く先生に知らせないと・・・

そう考えた俺は先生たちの方へと駆け出そうとして

「やっと追いつきましたよランサー！！

あ、ご主人様～どうですか？似合いますかこの水着～」

こちらに向かって万遍の笑顔で手を振るキャスターをみて盛大にずっこけた

ああ・・・いったい何が起こってるんだろうか・・・

狂乱の砂浜

ＳＩＤＥ　一夏

何故だ・・・何故キャスターがここに・・・
しかもランサーってサーヴァントのクラス名じゃ、てことはあの男はサーヴァント？
いやいや、それはないだろう何でキャスターが敵のサーヴァントとここに来るのかな
千冬姉たちの目からどんどん光が消えてる、そしてキャスター笑顔で手を振るのはやめて
何か色々と嫌な予感するからマジで俺、今度こそ死んじゃうかもしれないから

「ご主人様〜！！！！」

などという俺の思考もむなしく、一直線にキャスターは俺に飛びついてきた
そしてその瞬間、周りから黄色い声と怒りの声が同時に響く

「誰あれ！？織斑君の彼女！？」

「ちょっと待って、あの人ってこないだ織斑君の部屋にいなかった！？」

「獣耳＋ご主人様って織斑君そんな趣味が・・・」

「一夏さん！！誰なんですのその人は！！」

「説明しなさいよ一夏ァ！！！！」

・・・ハッ！！現実逃避してる場合じゃなかった

とにかくキャスターを何とかしないと

「何で来るんだよ！！隠れてろって言ったろ！？

それと離れてくれ、周りからの視線が痛いからァァァァ！！」

「しょうがないじゃないですか！！

ランサーがこちらに来ている状態でご主人様を一人にしておけません！！」

そうだ！ランサーも来てるんだった

マズイ、もしここで戦闘にでもなったりしたらクラスの人たちが・・・

ようやく思考が回復してきた俺は辺りを見回しランサーを探す

「ま、待てマスター！！少し落ち着け、話せばわかる！！」

「・・・・・・何で、来た」

そこで視界に移ったのは先程の眼鏡の少女がランサーにパラソルを突きつけている姿だった

「いや、男としてナンパをしｎ「ー　ヒュオッ！！」ま、待て待て落ち着け！！」

向こうも向こうで大変そうだな・・・

ってか、あの子がランサーのマスターなのか？まさか俺と同じ1年

とは・・・

「織斑・・・更識・・・」

「「・・・・ッ！？」」

砂浜にウチの姉（闇魔）の声が冷たく響く

俺と眼鏡の少女・・・更識さん（仮）は恐る恐る後ろを振り向いた・・・するとそこには腕を組んで仁王立ちする千冬姉が

「どういうことか・・・説明してもらおうか・・・？」

「「スイマセンでした！！！！」」

とりあえず土下座、ろくな言い訳を思いつかないこの状況ではこれしかない

土下座している俺と更識さん（仮）に千冬姉及びクラスメイトの視線が突き刺さる

ヤバイ、早く何とかして誤魔化さないといろいろとマズイ気がする・・・よし！

「じ、実はこの2人は兄弟で俺と更識さん（仮）の友達なんだ！！それで偶然この近くにいるっていうから会えないかって連絡したりしなかったり！？

そうだよな！？更識さん（仮）！！それにそっちの友達の兄弟二人！！」

完全に嘘っぱちである。しかし人間追い詰められるとすらすらと嘘が言えるもんだな

あとは呆然としている三人がこの話にあわせてくれれば・・・

「な、そうだよな！！3人とも！！」

「・・・う、うん。そう！まさかここまで来るとは思わなくて・・・」

「いやぁ、誘われたから思わずここまできちまったぜ！！なぁ、妹よ！！」

「そうですね・・・失敗しましたね・・・オニイチャン・・」↑かなり嫌そう

「と、言うわけなんだ千冬ｎ「バガァァァァンッ！！！！」」

「織斑先生だ、馬鹿が」

・・・千冬姉、どこから出席簿を・・それと威力が強くなってるような・・

「・・・まぁいい、後でたっぷりと尋問はしてやる」

「教官、その際には私も呼んでください」

「僕もお願いします、織斑先生」

尋問て・・・ラウラとシャルも反応して手を上げないでくれ

「ご主人様～、せっかくの海なんですから遊びましょう！！
私、一度でいいからご主人様とビーチバレーをやってみたかったんです」

「あ、わたしもやりたい～」

・・・うん、キャスター。頼むから大人しくしててくれ
それとのほほんさんもキャスターを煽らないでくれないか、頼むから

「えっと・・・お名前らんさーだっけ～？
じゃあ、らんさーもびーちばれーやろうよ～」

「ビーチバレー？面白そうだな・・・
いよぅし、俺とマスターも参加してやろうじゃねぇか！！」

「ランサー！？」

いつの間にかランサーまで入ってるし・・・
それと更識さん（仮）俺は君とはいい友達になれると思う。いや、
確実になれるだろう

「ほう、まだ話は終わっていないのに遊ぶ気か・・・いい度胸だな・・・」

ぎゃぁぁぁぁ！！！！閻魔が覚醒したぁぁぁぁ！？
やばいよ、何かもう女の人が出しちゃいけないようなオーラがでてるよ千冬姉！！

「あ、おりむらせんせいも～いっしょにやりませんか～」

のほほんさあああああん！？待って！！これ以上怒らせないでぇぇぇ！？

「いいだろう、相手になってやる・・・
おい専用機持ち４人、私のチームに入れ！！」
あれ・・・案外普通に了承した？
「ああ、それとな一夏
スポーツに怪我は付き物だからな。覚悟しておけよ？
さて今からやる事と殺る対象はわかったか、理解したな貴様ら！！」
「「「「了解！！」」」」
「千冬姉待って！！なんか字が違った気がするよ！？
それに皆も了承するな！！対称って誰！？もしかして俺！？」
俺の叫びも虚しく、すぐに砂浜に試合開始のホイッスルが鳴り響く
ちなみにチームは千冬姉＋専用機持ち４名
俺、更識さん（仮）、のほほんさん、サーヴァント２名。試合形式は５ＶＳ５の２５点先取だ
そしてまずは千冬姉チームからのサーブ
「これは夫からの制裁だ！！受け取れ、嫁ぇぇぇぇ！！！！！」
「いきなりすぎるだろぉぉぉぉ！？」
ラウラから発射された弾丸サーブは真っ直ぐに俺の顔面へと向かってくる
だが、その人間には取れないであろうスピードのボールは俺に当た

ることは無かった
なぜなら俺の前でキャスターがボールを間一髪、上に弾いていたからだ

「大丈夫ですか？ご主人様」

「あ、ありがとう・・・」

俺はキャスターにお礼を言うと、ボールの行方を追う
そしてボールはのほほんさんがトスすると同時にランサーが相手陣地に叩きつけた

俺は今、単純に叩きつけたといったが、実際はそんなレベルじゃないその音速ともいえるボールは着弾した周囲の砂を吹き飛ばし、その中に埋もれている

唖然・・・そういう言葉が今の状況に当てはまるのだろう
クラスの皆や相手チーム・・・千冬姉ですら目を見開いている

「ん？何だよ今のは得点に何ねぇのか？」

「ランサー・・・ちょっとは加減して・・・」

更識（仮）さんはため息を吐きながら額を押さえている
そして、その後も試合は続いたのだが・・・結論からいってしまうとウチの圧勝だった

終始、向こうのチームから放たれる殺人サーブをキャスターがレシーブし
それを俺達3人でネット近くにトス、最後はランサーが叩きつける

といった感じだ

終盤なんか、俺と更識さんとのほほんさんでローテーションを組み1人がトスする間、残り2人は雑談してたしな。後はサーヴァント勢にまかせっきりだ

それで更識さん（本人から名前を聞いたので（仮）は無）と話をしたのだが

俺の予想通り、やはりランサーのマスターは更識さんだった

俺は聖杯戦争について話がしたい・・・と小声で提案したのだが

「今は人が多いから・・・今日の夜に・・・」

「わかった。じゃあ、夜に連絡する

だから旅館の部屋番号だけ聞いておいてもいいか？」

「わかった・・・」

今日の夜は忙しくなりそうだな・・・

そう思考した俺は苦笑いしながら頭をかくのだった

聖杯戦争への決意

昼間行ったビーチバレーの激闘から数時間後
一夏は同盟について話し合うため簪の部屋へと向かっていた

「まさかあそこまで怒られるとは・・・」

（ごめんなさい・・・）

旅館での食事後、部屋へと戻った一夏を待っていたのは姉からの説教だった
曰くあの女は何だの、あいつらの身体能力は化け物か！？など延々と聞かれたのである
その後、箒たちいつものメンバーも合流したので飲み物を買ってくると部屋を後にしたのだ

（あ、ご主人様ここじゃないですか？ランサーのマスターの部屋）

（ホントだ。危うく通り過ぎるところだったよ）

一夏はそのままドアの前へと立つと、数回ノックし相手の反応を待つするとクラスメイトの子らしき女の子がドアを開けてくれた

「誰ですか・・・ってお、織斑くん！？」

「夜中にごめんな
更識さんってこの部屋だよね？悪いけど呼んでもらっていいかな」

「は、ははははは！！ちょっと待ってて！！」

ドアを開けた子はそう言うと大急ぎでドアを閉め、部屋の中から叫び声が聞こえる

しばらくすると、浴衣がよれよれになった更識さんが息を切らして出てきた

「更識さん・・・どうしたの？」

「・・・なんでもない・・・」

（ご主人様・・・どこまで・・・）

その姿に首を傾げる一夏だが、簪の気迫に思わず押し黙った

一夏の横ではキャスターが服の袖を目に当ててヨヨヨと涙をながしている

そしてそのまま旅館を後にした一同は、山道を少し外れた位置まで移動した

ちなみにサーヴァントの二人はここに来る途中で実体化している

「・・・ここらへんでいいかな？」

「そうですね、この辺なら人は来ないでしょう」

そう呟いた一夏はその場で立ち止まり、真剣な表情で簪に振り返る

「更識さん、単刀直入に聞きたいんだ

君は聖杯戦争に何のために参加したんだ？」

「私は・・・自分の力で大切な人を守りたいだけ・・・」
簪も一夏の目を見ながら答える。その目にはしっかりとした決意が映っていた
そんな簪を見た一夏は顔を抑えて、笑いを堪えている
「なにがおかしいのっ！？」
そんな一夏の姿をみた簪は激昂し、一夏に向かって怒鳴りつける
一夏はそれに対し、首を振って簪の目を見つめ返して呟く
「いや、まさか俺が後で言おうとしてた事
そのまま言われるとは思ってなかったから・・
昼から思ってたけど、やっぱり似た者同士なんだな・・・俺達って」
そう言うと一夏は少年のような笑みを浮かべる
その言葉と笑みに簪は顔を赤くしながら一夏から目を逸らした
「ご、しゅ、じ、ん、さ、ま～？」
そして一夏の後ろからキャスターの不機嫌そうな声が響く
「な、何を怒ってるんだ？キャスター」
「べっつにぃ～。わたし、怒ってないでーす
だってこんなのいつもの事ですし、分かりきっていましたから」
キャスターはそう言うと頬を膨らませ、そっぽを向く
一夏はそのキャスターの行動の意味がわからず首を傾げるばかりだ

「・・・？まぁいいや
それで簪さん、提案なんだけど・・・俺と同盟を組んでくれないか？
まだ、他のサーヴァントとマスターがどんな奴かも分からないけど・・・
もしかしたらＩＳ学園にも攻め込んでくる奴がいるのかもしれない
それで皆が傷ついたら、俺は俺自身を絶対に一生許す事ができないと思う」

簪は一夏の言葉を真剣に受け止める
何故なら自分も一夏と同じ立場にいるのだから
もしかしたら自分のせいで姉や親友、その他の人まで死ぬかもしれない
その可能性を考えるだけで冷や汗が頬をつたい、心臓の鼓動が早くなった

「私も・・・皆を守りたい
お姉ちゃんや、本音や、虚さん、大事な人を・・・ううんＩＳ学園の皆を守りたい」

「じゃあ・・・」

「同盟、成立・・・だね」

簪がそう言うと一夏は笑顔になり、簪の手を握りながらお礼を言ういきなり手を握られた簪は真っ赤になり、頭から湯気が出ている状態である

「・・・同盟が成立したのはいいんだけどよ
キャスター、俺らって完璧にマスターに忘れられてねぇか？」
そう呟いたランサーは同じく話に参加できなかったキャスターの方を見る
だが、キャスターはランサーの言葉が全く耳に入っていないようだ
「まずは金的、次も金的、懺悔しやがれ！！これがとどめの金的だぁぁっ！！！！」
キャスターは物騒な言葉を叫びながら、近くにある木を蹴り続けている
ランサーはそれを確認すると再び自分のマスターたちに目を移した
「あ、更識さん。せっかく同盟組んだんだから
俺のこと名前で呼んでくれよ。中のいい友達は全員俺のこと名前で呼ぶしさ」
「じ・・・じゃあ、私のことも・・簪でい、いいよ・・いち・・か・・」
「おうっ、これからよろしくな簪」
「う・・・うん」
一夏と簪の周りには一方的のような気もするが、桃色の空気が漂っていた
どう見てもイチャついてるようにしか見えない二人を見てランサー

はため息をつく

そして再びキャスターに視線を戻すと、蹴りの威力と速度が増していた

それを見た後、ランサーは首を鳴らして顔を上にあげる

「風が・・・冷てぇなぁ・・・」

そう呟いて空を見上げるランサーの背中には哀愁がただよっていた

福音接近・戦の幕開け

簪と同盟を結んだ翌日、一夏は千冬に呼ばれ集合場所へと向かっていた
何でも今日は丸一日ＩＳの各種装備と試験運用を行うらしい

（ご主人様～、何で遊べないんですか～せっかくの海なのに・・・）

（さっきも説明したろ？
というか遊びたいんなら簪と一緒に遊べばいいんじゃないか？）

一夏がそう言うと、キャスターは「はぁ」とため息を吐く

（ご主人様・・・鈍感すぎです・・・）

（・・・・？？）

一夏はその言葉の意味を聞こうとしたが、集合場所に到着したので断念する
集合場所には現在、専用機持ちメンバーと箒が既に到着していた
その後で千冬から今日やる事の説明があった後、鈴が疑問を口にする

「あれ？織斑先生、箒は専用機持ちじゃないんじゃ・・・」

「ああ、それについては・・・」

「ち～ちゃ～ん！！！！」

声が響く。そちらの方向を見るとうさ耳をつけた女性が崖を駆け下りているのが見えた
それを見た専用機メンバーは一夏を除いて唖然としている

（ご主人様・・・アレは・・・）

（東雲　束・・・ＩＳを開発した箒の姉さんだよ）

それを聞くとキャスターは千冬にアイアンクローをされている束を見つめる

（どうしたんだ？）

（あの人・・・いえ、何でもないです）

キャスターと会話している一夏をよそに、束は紅椿のフィッティングを開始する
そしてそのまま箒による紅椿の試運転を行っていた一同に一つの連絡が入った
それは特命任務レベルＡのＩＳ学園からの依頼であり、千冬はそれを見て顔をしかめた

専用機持ちメンバーはそのまま臨時の作戦本部に集合する
そこで告げられたのは今回の任務を専用機持ちメンバーで行うと言う事だった
そして束の提案により、その作戦は箒と一夏が担当する事になる

（キャスター、悪いんだけど俺が作戦に出てる間は簪のところにいてくれないか？）

作戦のため、出撃場所に向かう途中に一夏から告げられた一言にキャスターは硬直する

（な、なんでですか！？ご主人様を守る事こそ私の努めなんですよ！！）

（いや、キャスターって空飛べないだろ？
だから俺が飛んでる間は一緒にいれないじゃないか）

（それはそうですけど・・・）

それでも、とキャスターは立ち止まり不満げな表情を一夏にむける
一夏はそれを見て心配するなと告げると、駆け足で出撃場所へと向かった
キャスターは一夏を見送ると、指示どおり簪の元へと移動した

今日は自由行動日であり、簪は現在釣りをしているランサーの隣で本を読んでいる

「マスター、こんなところにいていいのか？
昨日の着ぐるみ着た嬢ちゃんとでも遊んでりゃいいじゃねぇか」

「いい・・・昨日みたいな事が無いように貴方を監視する方が重要だから」

そう告げる簪にランサーはため息を吐くと視線を再び竿の先に移す

「それより、その釣り道具はどうしたの・・・？」

「釣り糸と針は落っこちてた。竿はその辺の枝をへし折って、餌

は現地調達だ」

「そう・・・」

その時、簪の後ろにある茂みがガサガサと音をたてる

「ど、どうも・・・」

するとキャスターがその茂みから気まずそうに出てきた

「何でこんな所にいんだよ？あの坊主はどうしたんだ」

「ご主人様はお仕事です・・・

ですからその間はあなた達といるようにと」

ランサーの質問にキャスターは半泣きで理由を告げる

簪はそれを見て、その隣に腰掛けると慰めるようにキャスター話しかける

本来、聖杯戦争中に自分のマスターの傍に敵サーヴァントがいるのは防ぐべき事だ

いくら同盟を組んでいるとはいえどそれは変わらない

だが、キャスターを慰める自分のマスターを見て

ランサーはその光景に苦笑いを浮かべると再び釣りをし始めた

（ま、あの坊主がそんな不意打ちするような真似はさせねぇだろうしな）

ランサーは昨日であったキャスターのマスターである一夏の事を思い浮かべる

同盟を結んだ帰りに少し話したのだが、そんな真似をするような奴には見えなかった
自分のマスターと同じで、殺し合いを良しとせず戦争を止める意志を持つ者

「変わり者だねぇ・・・今回のマスターたちは」

「ランサー・・・何か言った？」

「何でもねぇよ、マスター」

ジト目でこちらを見る己がマスターにランサーはとぼけるように誤魔化す

（まぁ、こんなのも悪くはないわな）

ランサーはそれに戦えねぇのは不満だが・・・と呟くと小さく笑った

ー　1時間後

「・・・・・・・ッ！？」

簪の隣で寝ていたキャスターが突然飛び起きた
その顔は青く染まり、耳と尻尾はピンと立って冷や汗が頬をつたっている

「ご主人様・・・？ご主人様っ！！」

「・・・・・!?ランサー!!」

「おうよ!!」

キャスターはそう呟くと、全速力で駆け出した
それを見たランサーと簪もただ事ではない事を感じ、その後を全速力で追いかける
ランサーが最速のサーヴァントという事もあって、幸いすぐに追いつく事ができた

「キャスター、どうした!!いったい何が起きた!!」

ランサーは走りながらキャスターに問いかける

「ご主人様が・・・ご主人様が・・・」

しかし、キャスターはそう呟くばかりでランサーの言葉が耳に入っていない
そして、森を抜け砂浜にきたところで移動している三人に何かが飛来してきた

「!?キャスター!!避けろぉっ!!」

「ッ!?」

三人に回避されたそれは凄まじい速さで砂浜に突き刺さった
そして、砂埃が晴れてそこにあったのは・・・矢だ

「矢・・・まさかアーチャーか!?」

聖杯戦争におけるサーヴァントのクラス。その1つであるアーチャーの狙撃だ
それを理解しながらもキャスターは一刻も早く一夏の元へと向かおうと駆け出した

遠距離から飛来する矢。それを放つ存在を無視し、一夏の元へ向かおうとするキャスター
だが、その進行方向に放たれた矢が幾本も突き刺さり動きを止める
そして再び狙撃。まるで一夏の元へキャスターが向かうのを妨害するかのように

キャスターの胸で嫌な予感が膨れ上がる
早く一夏の元へと向かわねばならないのにこれでは向かう事ができない

アーチャーが見えない距離から狙撃している以上、こちらが圧倒的に不利
ましてやランサーにはマスターを抱えているハンデもある
防戦一方の膠着状態が続くことにキャスターは下唇を噛んだ

しかし数分後、アーチャーからの狙撃が止まる
膠着状態が続く事を良しとしなかったのか、他に理由があったのかは知らないが
これぞ好機とばかりにキャスターとランサーはその場を駆け出した
そしてそのまま森の中を駆け抜けて旅館へと戻った三人

「ご・・・主人・・・様・・・？」

そこで三人が見たものは血を流し、旅館に運ばれる一夏の姿だった

一夏のユメと狐の記憶

旅館から少し離れた森の中。一夏と同盟を結んだその場所で簪は膝を抱えていた
その横ではランサーが木に背中を預けるようにしてたたずんでいる

「マスター」

突如ランサーからかけられる言葉。小さく呟かれたそれは簪の耳にひどく響いた

「あの坊主が傷ついた事は事実だ
だけどそれから目を背けてんじゃねぇよ」

「・・・・・・」

その言葉に簪の返事は無い
ランサーはそれを見ると苛立ちげに言葉を続ける

「俺に言ったな。学校の人間を聖杯戦争に巻き込みたくないと
大切な人を守るために聖杯戦争を戦い抜くと。・・・昨日も坊主に言っていたな
もう一度だけ聞いてやる。お前、聖杯(コロシアイ)戦争に参加する気があるのか？」

その言葉に簪の肩がビクッと跳ね上がる
簪は頭では理解していた。ランサーの言っている事は正しいと
聖杯戦争に参加する以上、簪や一夏だって死ぬ事になるかもしれないからだ

「・・・ある・・」

それはひどく小さく、そして弱弱しい呟きだった
ランサーはそれを聞いて簪の胸倉を掴んで顔をあげさせた
ようやく上を向いた簪の顔は目が赤く、頬は涙で濡れている

「・・・チッ！！」

そんな簪を見てランサーは小さく舌打ちをすると手を放して背を向けた

「さっき聞いた話だが・・・坊主は未確認のＩＳにやられたらしい
おそらくキャスターは坊主の危険を感じ取って坊主の所へ向かったんだろう
だが、それはアーチャーによって妨害された。・・・言いたい事はわかるな」

未確認のＩＳ・・・その操縦者もしくは黒幕がおそらくアーチャーのマスターだろう
先程の攻撃をこちらの妨害だけで済ました以上、それが最も適格だろうと思う

このままアーチャーを放っておけば、また一夏のように怪我をする人が出るかもしれない
そう思考した簪は手を強く握り締めてゆっくりとその場に立ち上がった

「ランサー」

「・・・なんだ？」

簪の口から漏れたそれは先程とは違う力強い言葉だった
それに対しランサーは後ろを向いたまま、声だけで返答する
ふと、海岸の方を見ると専用機持ちのメンバーが集合していた
おそらくは再び福音と戦うために空へと向かうのだろう
福音がアーチャーのマスターだとすれば、アーチャーの妨害がある
かもしれない
簪は目じりの涙をぬぐうと深呼吸をして真っ直ぐと前を見つめて呟く

「もし、アーチャーがまた皆を妨害しようとしたら
私の周りの人を傷つけようとしたのなら・・・私達で、アーチャーを倒すよ」

そう言い放った簪の目に迷いは無い
そしてそれを見たランサーも簪の覚悟を感じ取って獣のような笑みを浮かべた

「了解だ、マスター」

ー　一夏ＳＩＤＥ

「・・・どこだ、ここは」

現在、一夏は波の音を聞きながら見知らぬ海岸に立っていた
そして目の前では白い少女が歌を歌っている

（なんだろう、とても懐かしいような・・・）

一夏は少女を見た瞬間、懐かしいような感情にとらわれた
そして、そのまま近くにあった流木に腰を下ろすとそのまま少女を見続ける

何分・・・いや何十分立っただろうか
一夏が流木に腰を下ろしてからしばらくするとその少女の歌が止んだ
歌うのを止めた少女はその場に立ち尽くして空を見上げている

「どうかしたのか？」

一夏がそう呼びかけても少女の反応はなく、一夏も同じように空を見上げた

「呼んでる・・・いかなきゃ」

「え・・・・？」

空を見上げた一夏の耳に小さく響いたその言葉
一夏がその呟きに気づいて再び視線を戻す頃には白い少女は消えていた
そして・・・世界が反転する

（何なんだよ・・・って、草原？さっきまで砂浜だったのに・・・）

先程の砂浜とは違い、夜空に満月の浮かぶ荒野
その中心ではいつも自分の隣にいるキャスターが狐に囲まれていた
だが、その頬には涙がはらはらと零れ落ちていた

そして自分の中に流れ込んでくる様々な記憶と感情

それはある時、人間に興味を持った1人の神様の物語
藻女という人間の少女として転生した神様は人間に恋をした
だが、その正体を陰陽師に暴かれて宮廷から逃げ去る

その時の彼女の悲しみが慟哭が一夏の中へと流れ込んでいく

「ふざけんなよ・・・なんだこれ・・・」

いつも隣にいてくれた明るい少女の見た事もない表情
那須野の草原で涙を流すその光景に一夏は思わず拳を握り締める

自分を愛してくれた人々に追われ

自分が愛した人に決別され

眷属の狐に慰められて涙を流すその姿に一夏は何もできない自分の
無力感を噛み締めた

”ああ、わたしはなんと愚かだったのでしょう”

「違う・・・キャスターは愚かなんかじゃない」

人間に裏切られ、恐れられ、その少女はここまで逃げてきた
彼女は何も害は与えてはいないのに、ただ・・・富を与えようとし
ただけなのに

「人間ではない」・・・その理由だけで彼女は桃源を追われた

その後も妖狐討伐の軍勢は弁明をしようとする少女の言葉を聞こうとはしない
降り注ぐ鏃の中で少女は血にまみれても尚、人間達に向かって訴え続けた
”騙す気は無かった、もう立ち去るから忘れてほしい”
けれどその追撃が止む事は無かった。そして彼女は悟ったのだ
なんて狭量な生き物
なんて乱暴な憎しみ
なんて思い上がった独善
なんて、なんて・・・弱弱しくも愛おしい、限りある命たち
少女は本気で人に・・・人間になりたいと思っていた。だがその思いも無駄だったのだ
人が神を崇め、神の意識と同一し神域に触れようとするかのようにそんな努力をしても、どんなに力を尽くそうとも、人が神にはなれないように
”神が人になれる筈が無かったのです”
そして少女は破魔の矢を胸に受け、泣くように崩れ落ちた
それが玉藻の前の・・・いつも隣にいてくれた少女の物語だった
「何でだよ!!なんでキャスターが・・・タマモが死ななきゃな

らないんだ！！」
それを見た一夏は涙を流し、叫びながら地面に拳を叩き付けた
その瞬間、再び世界が反転し一夏は最初にいた海岸へと戻ってきていた
そして一夏の前には膝下までを海に沈めた白い騎士が立っていた

「力を・・・欲しますか」

「え・・・？」

「力を欲しますか・・・何のために」

その言葉に一夏は目を閉じると、ゆっくりと自分の手を見つめながら呟く

「俺はさ・・仲間を守るために力がほしい」

「仲間を・・・」

「ああ、世の中ってさ色々戦わなきゃいけない時があるだろ？
もし仲間が不条理な暴力に襲われてるとしたら・・・俺はそれを許さない」

「そう・・・」

そう言い放った一夏の頭によぎるのは自分を主と呼ぶ一人の少女
白い騎士は一夏を見て静かに頷いた

「もう・・・あんな思いはさせたくない」

「だったら、行かなきゃね」
後ろから突然声をかけられて振り向くと白い少女が立っていた
その少女は人懐っこい笑みを浮かべて一夏をじいっと見ている

「ほら、ね？」

少女はそういうと一夏の手を握って、また笑みを浮かべる
一夏はそんな少女を見て照れくさそうに笑い「ああ」と答えた

その瞬間、世界に変化が訪れた
周りが眩くなって何も見えなくなる。
夢の終わりってこんな感じなのか・・・と一夏は思考しながら意識を閉ざした

そして、再び目を開けるとそこには天井が映っていた

「ご主人様・・・」

一夏が目を覚ました事によってキャスターは涙を浮かべて一夏に抱きついた
いきなり抱きついてきたキャスターに一夏は驚いたが、何も言わずその頭を撫でる

「ごめんな、タマモ・・・心配させて」

「ほんとです・・って、ご主人様・・・今なんと」

キャスターはタマモと呼ばれたことに驚くが一夏はそのままタマモを抱きしめる

「ごっ、ご主人様！？ど、どうしたんですか！！
いや私は嬉しいですけどもっ、むしろこのままカモンカモン！？」

「ごめん・・・タマモ、気づいてやれなくて
俺はタマモを恐れたりなんかしない、ずっと一緒にいるから」

一夏はキャスターの過去を知った。知ってしまった
だから一夏は例え人間ではなくても、ずっと自分たちは仲間だとキャスターに伝えた
・・・つもりだったのだが

「ワ、ワンモアプリーズ？
今の言葉、もう一度おねがいします・・・っ！！」

頬を染めそう告げるキャスターに一夏は疑問を抱くももう一度同じ言葉を口にする

「俺はタマモとずっと一緒にいるから」

「きゃーーー☆ーーっ！！きたきたきたーーーーーーっ！！
ご主人様。い、今のは・・・俺の嫁宣言と見て間違いありませんね！？」

「え？いや、ラウラじゃあるまいし・・・」

「というか録音しました。もうぐるぐるです

すでに脳内再生件数１０００回を突破しています！！
コメント数はその十倍！！！！マイリスは私しかしてまｓ（ｒｙ」
一夏の否定は完全に耳に入っておらず
まるで子供のようにはしゃぐキャスターの姿を見て一夏は動きが止まる
「やったーっ！！ついに旦那様ゲットです！！」
「い、いやキャスｔ「タマモって呼んでくださいっ」・・・タマモ」
有無を言わさず、とはまさにこのことだろう
どうやって誤解を解こうかと思考する一夏だが、ふと福音の事を思い出した
「そうだ！！福音は！？あれからどうなった！！！！」
「先程、専用機持ちの方たちが撃墜しに行ったらしいですが・・・」
一夏はそれを聞くと立ち上がって、福音の元へと向かおうとする
「ご主人様、次は私もついていきます」
タマモがそう言い放つ。一夏は当然断ろうとしたがタマモはそれを許さない
流石に背負ったまま飛ぶのは無理なので近くに連れて行くということで了承してもらった

「さて、行くぞ。タマモ」

「了解です旦那様」

二人はそう言うと仲間を助けるために戦場へと向かう

一夏のユメと狐の記憶（後書き）

次回おそらく槍弓戦になると思います

蒼き槍兵と赤き弓兵

海に隣接した森、その中に1人の男が立っていた
その男の鷹のような視線の先にはキャスターを抱えた一夏が飛んでいる

「ふむ、まさかここまで早く回復するとは・・・
あのサーヴァントの魔術、もしくはあの少年かＩＳの能力か」
そう呟くと、男は黒塗りの弓を構え一夏たちに狙いを定める
だが、矢を構えたその瞬間に男の後方から殺気と同時に赤い槍が放たれた
それを男は転がるようによけると槍を放った人物に向き直った

「ようアーチャー。俺とちょっと喧嘩していかねぇか？」

「いきなり人に攻撃しておいて第一声がそれか
武器から見たところランサーのようだが・・・後ろの少女はマスターか？」

そう言うとアーチャーはランサーの隣にいる簪に視線を移した
そしてはぁとため息を吐いた後、アーチャーは弓を消して双剣を構えた
次の瞬間、森の中に金属音が響き渡る

最初に動いたのはランサーだった
その神速ともいえる突きはアーチャーの胸へと向かい
アーチャーはそれを両手に構えた双剣で流すと同時にランサーに反撃をする

だが、ランサーもそれを避けて再び突きを繰り出す
一合、五合、十合と交わされる槍と双剣
その凄まじい衝撃と金属音に簪が目を奪われる中、双剣が宙を舞った
これでアーチャーに武器は無い。本来ならそこで勝負は決着するはずだった
・・・そう、本当に彼の武器が無くなったのなら

「何だとっ！？」

ランサーが驚愕の声をあげる
突き出されたランサーの一撃はあろうことか同じ双剣に防がれた
弾いたはずのそれが再びアーチャーの手の中に納まっている
そして再び巻き起こる剣戟の嵐。簪はその光景に見入り、同時に恐怖を抱いていた

「27・・・それだけ弾いてもまだあるとはな
いいぜ、聞いてやる。貴様いったいどこの英雄だ」

「そう聞かれて正直に答えるとでも？しかし、君はわかりやすいな
最速であるランサーでもこれほどの速度を出せるのは3人といまい
その獣のような身のこなし。さらに真紅の魔槍とくれば、該当するのはただ1人」

アーチャーがそういった瞬間、ランサーの気配が変わる

「ほう、良くぞ言った
ならばくらうか？我が必殺の一撃を」

ランサーは槍を構えなおし、真紅の瞳でアーチャーを睨みつける
アーチャーはそれを見て皮肉げな笑みを浮かべると双剣をしまって
両腕を下げる

「必殺とはまた大きくでたものだ
弱い犬はよく吠えると言うが・・・さて、君はどうだろうな」

その言葉を聞いた瞬間、ランサーの体から凄まじい殺気が溢れ出した

「貴様・・・俺の真名を知っていてその言葉を吐くか
マスター、宝具を使う。できるだけここから離れてろ」

ランサーの見た事もない表情と殺気に簪は慌てて頷くと少しずつ後
ろに後退した
許可を得たランサーは槍を握る手に力を込めなおすと、そのまま跳
躍し槍を振りかぶる

「アーチャー・・・この一撃、手向けと受け取れ！！！！」

「悪いが断らせてもらおう。Ｉ　ａｍ　ｔｈｅ　ｂｏｒｎ　ｏｆ
ｍｙ　ｓｗｏｒｄ・・・」

アーチャーが詠唱を始める。両者はどちらも切り札を出す気だ
ランサーの持つ真紅の魔槍に魔力が集結されていき、絶対的な死が
放たれた

「突き穿つ（ゲイ）・・・死翔（ボルグ）の槍！！！！」

「落天覆（ロー）う・・・七つの円環（アイアス）！！」

２つの伝説がぶつかり合った瞬間、衝撃と轟音がその場に響き渡り
その衝撃に木々が揺れ、突風が森の中へと吹き荒れて煙を撒き散らす
そして煙が晴れたときに簪が見たのはそこに立つ２つの影だった

「貴様・・・何者だ」

「なに見てのとおり、ただの弓兵だよ」

「ほざけ、弓兵が宝具を防ぐほどの盾を持つものか！！」

ランサーの言葉にようやく簪は宝具が防がれたのを理解した
そして、それと同時にランサーの攻撃を退けたアーチャーに恐怖する

「しかし目的だった織斑一夏の妨害は防がれた
・・・ここは敗者らしくおとなしく退くとしようか」

アーチャーはそう呟くと霊体化して姿を消す
ランサーは当然、アーチャーを追いかけようとしたが
自分のマスターである簪をここに１人でおいていく訳にもいかず断念した

「・・・ちっ、逃げやがった
おい、これからどうするんだ？マスター」

「・・・・・・。」

ランサーの言葉に簪はその場に座り込んだまま答えない
それを不審に思ったランサーは簪の元へ行き笑いながら喋りかけた

「どうしたマスター、ひょっとして腰が抜けたか？」
その言葉に簪が小刻みに震える。・・・どうやら図星らしい
ランサーはそれに大爆笑し、簪が涙目になって反論する
「ハハハハハッ、あんだけ格好つけといてそれかよ？
ざまぁねえなマスター？ダーーーーッハッハッハッ！！！！」
「・・・う、うるさいっ！
しょうがないじゃない！！本気で怖かったんだから・・・」
「わ、悪い悪い。ところでこれからどうする。旅館に戻るか？」
ひとしきり笑い終えたランサーは、にやけながら簪に問いかける
「いちかのところへ行く・・・
ランサー、さっき一夏が飛んでいった方向わかる？」
簪は少し考え、一夏の元へ行くことにした
ランサーはその言葉に「じゃあ行くか」と答えると簪を背中におぶって歩き出す
「ちょ、ちょっとランサー・・・自分で、自分で歩けるから・・・っ！！」
「さっきまで腰抜かしてた奴が何言ってんだ
それにこれから移動すんだからこっちの方が早いだろうが」
そう言うとランサーは木々の中を凄まじいスピードで駆け抜けていく
羞恥で頬を染めながらその背中にくっついていた簪はある種の安心

感を覚えていた

（何だろう・・・この感じ、とっても安心するような・・・）

それは昨日、一夏の笑みに感じたものとはまた違う感情だった

簪はその感情によって心が安らいでいくのを感じ、ゆっくりと瞼を閉じる

そしてその感覚が昔にも感じた事があることに気がついた

”簪ちゃんをいじめちゃダメッ！！”

（・・・ああ、そうか）

それはまだ簪が幼い頃の記憶

自分の大好きな姉と・・・まだ仲がよかった時の懐かしい記憶

（小さい頃にお姉ちゃんと一緒にいた時みたい・・・

もし、私にもお兄ちゃんがいたらこんな感じだったのかな？）

全然大きさが違うけど、小さい頃に自分を守ってくれたあの背中の感触だ

とても優しくて頼りになり・・・とても安心する懐かしい感覚

「ありがとう・・・おにいちゃん」

簪はそう思考すると、最後に1言呟いて眠りに着いた

ー　プロローグ

「ありがとう・・・おにいちゃん」

そう呟かれた瞬間、ランサーの思考は一瞬停止した

「は？おい、マスター何を・・・」

ランサーは慌てて、肩にある簪の顔に視線を移す
だが、元凶である己のマスターはスヤスヤと気持ちよさそうに寝息を立てていた

「何だ・・・寝言か
ん？待てよ。マスターの姉妹って姉が1人だけだったような・・・」

そこまで思考したランサーは聞き間違いか・・・とため息を吐いて走り続ける
一夏たちの元に着いた時、背中で眠っている自分のマスターを
どんな愉快な起こし方で起こしてやろうかと考えて、面白そうに笑いながら

決着・福音との死闘

現在、一夏は福音と戦闘している仲間の下へ向かっていた

「くそっ・・・無事でいてくれよ」

「ご主人様、見えました！！」

抱えているキャスターの声に一夏は前方を見つめる
そこには箒の首を片手で掴んでいる福音がいた
キャスターはそれを見た瞬間、一夏の手の中から空中へと飛び上がり
手が自由になった一夏は雪羅の武器である荷電粒子砲を構えると福
音に向かって発射した
そしてその攻撃は見事福音に命中するが、福音は吹き飛びながらも
箒に攻撃をしようとする

「呪詛、炎天！！」

その言葉と共に放たれた呪布が福音の翼に命中し、爆散する
一夏は落下するキャスターを再び抱えると箒のもとへと一直線に飛
んでいく

「無事か、箒！！」

「いち・・・か・・・？」

キャスターを地面に降ろし、箒の安否を確認する
一夏はそこで箒の髪型がいつものポニーテールじゃない事に気がつ
いた

「あれ、箒その髪型・・・？」

「こ、これは・・・」

「ちょうどよかったもな、はいコレ」

そう言いながら一夏が差し出したのはリボンだった
箒はそれを受け取ると、一夏の顔とリボンを交互に見つめる

「誕生日おめでとう、今日は7月7日だもんな
じゃあ俺は行ってくるよ。キャスター、箒を頼んだぞ」

「お任せください。ご主人様もお気をつけて」

一夏はそれを聞くとこちらへ向かってきていた福音へと急加速した
空中にいた他の専用機持ちメンバーも一夏の援護へと向かう
その中で箒だけはキャスターを不審な目で見つめていた

目の前の女は確か、前に騒ぎになった一夏の部屋にいた女だ
鈴たちから聞いた話では昼間の自由時間にも兄と一緒に現れたらしい
聞いた話では一夏の友人ということだが・・・何故それが一夏と一緒にここに来る

箒の頭の中で疑問が渦巻く中、突如キャスターの身に纏う気配が変わった

「・・・・ッ！？」

体から冷や汗が噴出し、全身が震えだす。箒の頭の中で警報が鳴り

響く
何故なら目の前にいる存在、その気配は人間のものではない
そしてキャスターは視線を岩場に移し、呪布を構えた

「アーチャー・・・出てきたらどうですか」

「ほう、よく気がついたな」

そう言いながら岩陰から現れたのは白髪の男
しかし、その男の纏う気配も人間のそれではなかった

「あ、う・・・あ・・・」

自分より上位の存在に対する絶対的な恐怖。箒は今それを感じていた
そんな箒を見て、キャスターは視線をアーチャーに向けたまま箒に言う

「早く、空に上がってご主人様の援護を
こちらに貴方がいては足手まといですから」

冷たく言い放たれたその言葉
普段の箒なら激昂し、絶対に反論しただろう
だが、今の状況では静かに頷いてキャスターの指示に従うしかなかった

その後、箒はすぐに空へと飛び一夏の援護に向かった
アーチャーはそれをただ見つめるのみ。何もしようとはしない

「意外ですね・・・まさかすんなりと行かせるとは」

「何、マスターから受けた命令はサーヴァントの参戦を阻止する事でね
ＩＳ操縦者が何人アレとの戦闘に参加しようが私には妨害する理由が無い」
アーチャーは皮肉げな笑みを浮かべながら答える
「だが、もし貴様らが参戦しようとするならば・・・」
そう言うとアーチャーはキャスターに殺気のこもった視線をぶつけ、霊体化する
その目には「もし参戦するなら容赦はしない」という意志が込められていた
もし、キャスターが援護をすれば必ず一夏たちの誰かが死ぬ事になるだろう
その事を感じ取ったキャスターは小さく舌打ちし
夜空に舞う己がマスターの無事を祈りながら空を見上げた

その頃、一夏は箒の単一能力・絢爛舞踏によってエネルギーを回復し
雪片弐型で福音と激しい空中戦を繰り広げていた
絶え間なく響く剣戟の音と巻き起こる光弾の嵐
それらの力は均衡し、どちらも一歩も譲らなかった
だが、戦いにおいて均衡とはいずれ崩れるもの
そして絶え間なく放たれる剣戟の中、福音に一瞬の隙が生まれた

「うおらぁっ！！！！」

「はぁぁぁぁぁぁぁっ！！！！！」

その隙を白式と紅椿、その３つの刀による斬撃が福音の翼を捉える
そして、そのまま落下する福音に一夏は最後の勝負を仕掛けた
だが福音も黙ったままやられはしない
自分に突撃してくる一夏に向かってエネルギー弾を乱射した

視界を埋め尽くす、光弾の嵐。一夏はそれら全てを紙一重でかわし
徐々に距離をつめる
そしてその距離が縮まると一夏は雪片を振りかぶり、力の限り振り
ぬいた

「これで・・・最後だぁぁぁぁ！！！！」

放たれたその言葉と共に振りぬかれた雪片は完全に福音を捉えていた
視界の端で福音のＩＳが解除され、鈴に抱えられる姿を見ながら一
夏は笑う
そして一夏の目の前に表示されるのはエネルギー残量０の文字
一夏はそれを見つめながら自分が纏っているはずの雪羅が消えてい
くのを感じた

（・・・まぁ、最後の攻撃に全部使っちまったからなぁ）

そう思いながら一夏は福音に斬りかかった時の速度のまま地上へと
落下する
落下している途中、こちらに向かって叫んでいる仲間の声を聞きな
がら一夏は目を閉じた

このまま地上へ落下したら下手したら死んじまうかな・・・などと思いながら

だが、いくらか時間が経ってもそんな衝撃は感じなかった

それどころか、急速に落下しているはずなのに妙な浮遊感を覚える

「・・・ったく、人使い荒いぜ。ウチのマスターはよ」

ゆっくりと瞼を開けると自分の体は誰かに抱えられ、空中を飛んでいた

「ランサー・・・？」

「よう、なかなかいい闘いだったぜ。坊主にしちゃ上出来だ」

それは聖杯戦争で同盟を結んでいるサーヴァント。真紅の槍を携えた蒼い騎士だった

軽口を叩きながらランサーは一夏を抱えたまま砂浜へと着地する

砂浜に降ろされた一夏の視界に移るのはこちらへ向かってくる仲間達の姿

それを見て、一夏は戦闘が終わったのだと実感しながらゆっくりと空を見上げた

戦いが終わり・・・　前編

「悪いなランサー。肩かしてもらって」

「なに、同盟組んでんだからこれぐらいはしてやるよ
それに男が坊主意外じゃ俺しかいないんだからしょうがねぇだろうが」

まさか女に背負わせるわけにもいかねぇしな、とランサーは続ける
それに一夏は「違いないな」と笑いながら返した

福音との死闘も終わり、一夏はランサーに支えられて旅館への帰路についていた
その後ろでは女子メンバーが気まずそうな顔で後ろをついてきている

その原因は簪とキャスター、それにランサーの存在だ

千冬は今回の任務を極秘任務だと言っていた

極秘任務という以上この任務は無関係の人間に知られるわけには行かない
それが無断で出撃し、いざ戦いが終わってみれば三人の人間に知られてしまった
おかげで専用機持ちメンバーは千冬にどうやって説明するか悩んでいた

簪についてはランサーやキャスターの現在の格好を見られたので
ここにいるメンバーに聖杯戦争のことをどう誤魔化すのかを必死に考えている

本当はすぐにランサーたちを霊体化させるはずだったが
任務を見ていた以上、千冬に会わせるべきだと言うラウラの意見に反対できなかった
ランサーたちを逃がすのは容易いが、千冬からの尋問は免れないだろう

問題はキャスターではなくランサーを見られた事だ
キャスターならなんとかコスプレで済ませる

だがランサーは昼間のアロハシャツならいいが
今は全身が青タイツで槍を所持。ハッキリ言って不審者以外の何者でもない

（ど、どうやって説明しよう・・・）

簪は再びどうやって弁明するかという事に思考を巡らせる

まさか、自分が呼び出した英雄ですと説明したところで誰も信じないだろう
というかそんな事を言えば、確実にふざけていると思われる気がした

いっその事、このまま一夏と一緒に雲隠れするかと考えたが
ＩＳ学園に戻る事を考えると結局後で追及されるのは目に見えている
隣にいるキャスターに視線を移すが、一夏の方を向いて自分の視線に気づいていない
そして再び簪は誤魔化すための言い訳を考えるのだった

・・・一方、こちらは専用機組

「・・・・千冬さんにどう説明するのよコレ」

「そうだね・・・僕ら無断で出撃した上に無関係な人連れ帰ってるし・・」

ため息を吐きながら歩く鈴にシャルロットが同意し身震いする
おそらくは千冬に会って説教される時のことでも想像したのだろう

「ていうかあの3人・・一夏の友達とか言ってたけど私はじめてみたわよ
もしかして私が転校してくる前の友達なのかな、箒はあの人たち知ってる？」

「いや、私は・・・・知らない」

鈴の質問に箒は頭の中で冗談じゃないと思いつつもできるだけ普通に返答する
フラッシュバックするのは昨日みた男、それに対峙する目の前を歩く少女

（何だったんだあの男は・・・確かアーチャーと呼ばれていたが
それに目の前を歩いているあのキャスターという女もだ
何か関連があるのだろうか、アーチャーは弓兵。だが、キャスターとは何だ？）

アーチャーとキャスター、その2人の関係に箒は頭を悩ませる

しかし、アーチャーが弓兵とわかってもキャスターという言葉の意味がわからない
箒はあまり英語が得意ではないが、幸いここには外国人の友人がいる
「セシリア、一つ聞きたいのだが。キャスターとは英語でどういった意味だ？」
「何を突然・・・ああ、たしかあの狐耳の人のお名前でしたわね
キャスターとは日本語で言うと・・・魔法使いとか魔術師といった意味ですわ
それにしてもあのご兄妹、変なお名前ですわね。キャスターにランサーだなんて」
セシリアの言葉で箒はあることに気がついた
弓兵、魔術師、ときてランサー・・・槍兵など、無関係とは到底思えない
つまり一夏を支えているあの青い男も、昨日みたアーチャーと同じ存在という事だ
何故、幼馴染の周りにそんな化け物のような人間が何人もいるのか
自分の知らない場所で何が起こっているのか。箒の胸で不安が渦巻く
「作戦完了・・・と言いたいところだがお前たちは重大な違反を犯した

よって帰ったらすぐ反省文の提出と懲罰用の特別トレーニングを受けてもらう
更識、旅館を無断で抜け出したお前にも同様の罰を与えるからそのつもりでいろ」

「「「「「「「・・・・・・わかりました」」」」」」」

戦士達の帰還はそれはそれは冷たいものだった
帰還した一夏たちは大広間で正座して千冬の説教を受けていた
それでかれこれ３０分は経っただろうか。千冬の後ろで山田先生がおろおろしている

「お、織斑先生・・・もうその辺で。皆疲れてるでしょうし」

「ふん・・・・」

「じゃ、じゃあこれからちょっと休憩してから診断しますね
そちらの一般人の方も一応診断しますから少し待っていてください
あ・・もちろん男女別ですよ、わかってますね織斑君！！」

山田先生の言葉に後ろで見物していたランサーとキャスターが反応する

「いや、おれは別に怪我なんかしてねぇから診断はいらねぇ」

「右に同じく。私にも必要ありませんのでお構いなく」

診断などされては色々と問題が出てくるだろう
そう考えたランサーとキャスターはすぐに部屋を出て行こうとする

「おい、どこへ行く気だ」
それを千冬は少し威圧をこめた声で制止する
「どこへって・・・帰るんだよ。見てわかんねぇか？」
「貴様ッ・・・、教官に向かって！！」
「ま・・待てラウラ！！！！」
ランサーの態度にラウラが激昂する
そのまま飛びかかろうとするラウラだが、箒が叫んでそれを静止した
「ど、どうしたの箒？いきなり叫んじゃって・・・・」
それに鈴が驚いたような顔で箒に言う
全員が呆気にとられる中、箒は冷や汗をかきながらランサーたちを見つめる
その瞳はまるで恐ろしいものと相対しているように怯えていた
箒のそんな表情を見た千冬は疑問に思うが、再びランサーたちへと視線を向ける
「・・・貴方達には色々と聞きたいことがある
それにそんな槍を持っているような男を見逃すわけにもいかないのでね」
千冬はそう言うと、ＩＳの武装を展開しランサーへと構える

「大人しく着いて来るのなら、悪いようにはしないが・・・どうする？」

「千冬姉！！」

「黙っていろ織斑。これは命令だ」

一夏は千冬に講義をしようと叫ぶが、有無を言わさない千冬の言葉に押し黙った
ランサーはその光景を見て頭をかきながら千冬に向かってゆっくりと歩きだす

「まいったな・・・気の強い女は嫌いじゃねぇが・・・」

ランサーが間合いに入った瞬間、千冬はランサーへと剣戟を繰り出す
狙いは槍を弾き飛ばし相手の首筋へと剣を添えてこちらの指示に従わせる
脅迫まがいだが、相手の得体が知れない以上ここで返すわけにはいかない

だが、その剣はランサーに突きつけられる事は無かった
振り下ろされたそれにランサーが槍をぶつけ、破壊したのだ
まさかＩＳの武装が槍によって破壊されると思わなかった千冬は驚愕し動きが止まる
そして、次の瞬間には千冬の首にランサーの持つ真紅の槍が添えられていた

「・・・・・・ッ！？」

千冬は目の前の男に恐怖した

武装だけとはいえど、ＩＳを破壊するその力に。そして、男が放つ
その威圧に
後ろにいる面々は完全に動きが止まり、完全に思考が停止していた
当然だろう。世界最強が経った今、目の前で完膚なきまでに敗北し
たのだから
全員の動きが止まり、静寂が訪れる中ランサーは槍を千冬の首から
ひいた
そしてそのまま後ろを向くとキャスターと共に部屋から出て行く

「・・・ま、待てっ！！」

すぐに我に返った千冬はその後を追うが部屋の外に2人の姿は無か
った
辺りを見回すがそれらしい姿はどこにも見当たらない
まるで悪夢でもみたような光景に千冬は呆然とその場に立ち尽くす
のだった

月夜の兎

「赤椿の稼働率は絢爛舞踏をふくめても４２％か・・まぁ、こんなところかな？」

空中投影のディスプレイに浮かび上がった各種パラメーターを見ながら
崖の上で一人、束は無邪気に微笑んだ。まるで子供のように。天使のように

「ん～・・・ん、ん～」

束は鼻歌を歌いながらコンソールを打ち、画面に別の画面が呼び出される
そこには白式第二形態・雪羅を纏った一夏の姿が映し出されていた
福音との戦闘映像を見ながら束は静かに呟く

「はぁ・・・本当に白式には驚かされるなぁ
まさか操縦者の生体再生まで可能だなんてね。これじゃまるで・・・」

「まるで、白騎士のようだな
コアナンバー００１お前が一番心血を注いだ１番目の機体に」

森から音もなく千冬が姿をあらわす
その姿は漆黒のスーツに身を包み、静かな威厳が満ちていた

「やぁ、ちーちゃん
どうしたの？こんな遅くに。夜更かしは美容の敵だよ？」

「ふっ、そうかもな」

千冬は束に背を向けたまま、木にもたれかかる
それに対して束も千冬の方を向こうとはしなかった
どんな顔をしてるかは別に見なくてもわかる。そんな確信が2人にはあった

「ところでちーちゃん問題です
白騎士はどこに行ったんでしょうか？」

「白式をしろしきと読めばそれが答えなんだろう」

「正解。さすがちーちゃん白騎士を乗りこなしていただけの事はあるよ」

束はそういうと無邪気に笑い、千冬に話を続ける

「それでね。例えばの話なんだけど・・・
コア・ネットワークで情報をやり取りしていたとするよね
ちーちゃんの一番目の機体「白騎士」と二番目の機体「暮桜」がもしそうだったら同じ単一使用能力（ワンオフ・アビリティー）を開発してても不思議じゃないよねぇ」

「・・・・・」

それに対し、千冬は無言
だが、束はお構い無しに話を続ける

「それにしても不思議だねぇ

白騎士のコアは私が初期化したから確実に初期化されてるはずなのに」

「不思議な事もあるもんだな」

何故、白式が暮桜と同じ単一使用能力（ワンオフ・アビリティー）を習得できたのか未だにそれは束にすらわかっていない。だが、彼女にはわから無くても問題は無い

「まぁいい、私もたとえ話をしてやろう」

「ちーちゃんが？珍しいねぇ」

「例えば、とある天才がある高校受験生を控えている男子そいつの試験会場を意図的に間違わせる事ができるとするそして、その時だけそこに存在しているＩＳが動くようにしておく

結果ＩＳを動かせないはずの男がＩＳを使っているように見える・・・」

「ん～、でもそれだとその時しか動かないよね」

「そうだな、お前は飽き性だからな」

「そうなんだよね～」

「・・・で、どうなんだ？とある天才」

そう呟いた千冬に束の表情は少し暗くなり、言葉を続ける

「実際わからないんだよね。白式がどうして動くのか」

「・・・まぁいい、次のたとえ話だ
とある天才が大事な妹を晴れ舞台でデビューさせたいと考える
そこで用意するのはその妹の専用機。そしてどこかのＩＳの暴走事件だ」

「すごい天才がいたもんだねぇ～」

「そうだな、すごい天才がいたものだ
かつて十二カ国の軍事コンピューターをハッキングした天才がな・・・」

束はそれに答えない。千冬も、もう言葉は続けない
数十秒の沈黙。長いようで短い時が過ぎた中、束はゆっくりと口を開く

「たとえ話・・・もう１個あった」

不意に呟かれたその言葉に千冬は耳を傾ける

「ねぇ、ちーちゃん
もし・・・いっくんが知らないところで殺し合いをしてたら、どうする？」

「・・・・なに・・・・？」

それを聞いた千冬は驚愕し、その頬を冷や汗がつたう
同時に自分の幼馴染がいったい何を言ってるのか理解できなかった

「今はまだ大丈夫だけど・・・
いっくんが誰かを殺すかもしれないし、殺されるかもしれない」
千冬は無言。だが束は静かに、そしてゆっくりと言葉を続ける
「ちーちゃん。これは警告だよ
弓兵と魔術師は大丈夫。槍兵も・・・たぶん大丈夫
でも、狂戦士と騎兵と剣士。それに暗殺者には絶対に近づかないで」
「待て、束！！お前は何を言って・・・！？」
千冬はそう言いながら束の方へ向き直る
そこには優しげに微笑む束。そしてその隣には赤い騎士が立っていた
赤い騎士を見た千冬の動きが止まる
鷹のような目でこちらを見るその騎士にはどこかで感じたような威圧があった
それは昼間に相対したあの槍を持った男と同じ威圧
千冬は目の前にいる幼馴染とその男を信じられないような目で見ている
「・・・じゃあね、ちーちゃん。行こうか・・・アーチャー」
束がそう言うと赤い騎士は静かに頷き、２人は千冬に背を向けて歩き出す
千冬がそれを追いかけようと走り出した時、岬に吹き上がる風が大きく唸りをあげた
「・・・・・ッ！？」

一瞬。吹き上がる風に千冬が目をつぶった瞬間
時間的には3秒にも満たないその時間で2人は姿を消した
2人がいなくなった事に気づいた千冬は木にもたれるようにしてその場に座り込む

「一夏が殺し合い・・・？一夏が、死ぬ・・・？」

親友の言葉を思い出し、千冬はその場面を想像して震えた
そして、もう1つ。親友が自分に告げた警告を思い出す

「アーチャー・・・・。弓兵・・・？」

束が言った不可解な7つの単語
弓兵、剣士、魔術師、槍兵、騎兵、狂戦士、暗殺者
親友の隣にいた赤い騎士。それが弓兵だとしたら・・・？

「・・・・・・・ッ！？」

そう思考し、千冬の顔が青く染まる
思い出されるのは一夏の友人と言うあの2人組

「ランサー、それにキャスター・・・」

ゆっくりとその名を呟く。信じられないように、信じたくないように
その名前を日本語にするとランサーは槍兵、キャスターは魔術師
親友が告げた7つの単語・・・その2つにぴったりと当てはまるのだ

「何が起きてる・・・なんで・・・

なんで、私に何も話してくれないんだ・・・一夏・・・」

膝を抱える千冬の頬を涙が伝う
頭の中で不安と疑惑、それに悲しみが渦巻いていた

・・・一方、その頃の一夏は

「旦那様～、先程の箒さんとの逢引はいったい何でしょう？私、おもわず霊体化をといてOHANASHIしたくなっちゃいました☆」

「ま、待ってくれキャスター！！ただでさえ、鈴たちに攻撃されて体が動かないんだぞ！？」

「知ってますか旦那様
浮気をした人にかける容赦は存在しないんですよ？」

「いやぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ」

「・・・一夏・・・？」

（どうした、マスター？）

「今、一夏の叫び声が聞こえたような・・・」

（そうか？俺は別に何も聞こえなかったが・・・）

（気のせい・・・かな？）

積み重なる疑惑

「ううむ・・・・」

ＩＳ学園が夏休みに入った初日、箒は腕を組みながら寮の廊下を歩いていた
しかし、その顔は何かを悩んでいるようで非常に困った顔をしている
何をここまで箒が悩んでいるかと言うと原因は千冬に呼び出された事にあった

「何なんだいったい。夏休み早々に千冬さんからの呼び出しとはひょっとして福音戦の説教の続きなのか・・・？いやしかし・・・」

「あれ、箒じゃん。何やってるの？」

「む、鈴か。実は千冬ｓ・・・織斑先生に呼び出されてな」

「げ、まじ？あんた夏休み早々ついてないわね」

「そう思うなら変わってくれ」

「断固拒否させてもらうわ
何が悲しくて夏休み早々にそんな悲惨な目にあわなきゃいけないのよ」

その言葉に箒は私が受けるのはいいのか！？と怒鳴ろうとしたが途中でやめた
もし、自分が反対の立場だったら確実に同じような事を言うだろう

からだ

「まぁ、ドンマイ。骨は拾ってあげるわ」

「慰めるならもう少しマシな慰め方をしてくれ・・・」

そう言いながら明るく自分の肩を叩く鈴に箒は軽く殺意を覚える

鈴はその視線に耐えられなくなって逃げようとするがその時、放送が入った

『あ～、コホン。生徒の呼び出しをする

篠ノ之、オルコット、デュノア、ボーデウィッヒ、鳳・・・以上5名

今から生徒指導室まで来るように。繰り返す、篠ノ之、オルk・・・・」

ダッ！！！！　↑　鈴が逃げ出す音

ガシッ！！　↑　箒が鈴の服を掴んだ音

「離しなさい！！私今から用事あるの！！大至急、緊急で！！」

「ハッハッハッ。さあ鈴よ、一緒に骨になりに行こうか」

「いやぁぁぁぁぁっ、助けて一夏ぁぁぁっ！！！！」

半泣きになりながら手足をバタつかせる鈴を箒は片手で引きずっていく

そして2人で生徒指導室に向かうと、扉の前でセシリア、シャル、ラウラと合流した

「セ、セシリア、ここはお前から入らないか？」

「何を言ってますの箒さん。ここは鈴さんが・・」

「な、何いってんのよ！？ここはシャルロットの方が・・」

「僕はラウラのがいいと思うな！？ほら織斑先生とドイツで一緒だったし！！」

「なぁ、シャルロット！！この私を裏切るのかぁっ！！！！」

いざ、扉の前に立った5人は扉を開けるのが怖くなり他の誰かに開けさせようとする

そのまま堂々巡りになりそうだった5人の会話は後ろから声をかけられた事で終了した

「何をしている。さっさと入らんか」

「「「「「でたぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！？」」」」」

ー　数分後

「・・・たく、何が「でたぁぁぁっ！？」だ。人を化け物みたいに・・・」

「「「「「・・・すいません」」」」」

あの後、千冬の出席簿アタックにより5人は撃沈
そのまま生徒指導室に連れ込まれ、現在は千冬の目の前で全員が並んで座っている

「まぁいい。今日お前らを呼び出したのは聞きたい事があったからだ」

その言葉に説教をされると思っていた5人は安堵する
そんな5人の様子を見て千冬はため息をつきながらも話を続けた

「単刀直入に聞くぞ
剣士、弓兵、槍兵、騎兵、狂戦士、魔術師、暗殺者・・・
これらの7つの単語についてお前ら何か知っている事は無いか？」

千冬の言葉に箒以外の4人は頭の上に？を浮かべている
だが、箒だけは千冬の言葉の意味を理解し、その顔つきは真剣になった

「教官。ひとついいでしょうか？」

「何だ、ボーデウィッヒ」

「今のは役職みたいですが、何故そんな事をお聞きになるのですか？」

「これは一夏に関する事でな・・・
お前ら、先程の7つの言葉を英語に訳してみろ」

一夏に関係する事と言われ、よけいに混乱する４人
だが、疑問に思いつつもその７つの単語を一つずつ順番に英訳していく

「まず剣士は・・・セイバー、かな？」

「弓兵はアーチャーよね。それに槍兵はランサーだし」

シャルロットと鈴は互いの顔を見ながら英訳した単語を話す

「騎兵はライダー、狂戦士はバーサーカーだな」

「そして暗殺者はアサシン、魔術師はキャスターって・・・
あら？この質問、確か臨海学校で箒さんがお聞きになりませんでしたっけ？」

「・・・ああ」

その後にラウラ、セシリアと続き箒はセシリアの言葉に静かに頷いた

「でも織斑先生。これのどこが一夏と関係してるんですか？」

シャルロットが千冬に言ったその言葉に他の三人も同じように頷く

「ランサーとキャスター・・・
この２人についてはお前らも名前は知ってるだろう」

その言葉に４人は納得がいったようなに手を叩いた
千冬はそれを見てため息をはき、箒は苦笑いを浮かべている

「そういえば不思議な名前の人でしたよね？ランサーにキャスターなんて」

「そうだな。普通に考えてそんな名前の奴が何人もいると思うか？」

「確かに不自然ですわね・・・まるで何かの役職、いえ役割のような」

セシリアの言葉に千冬はそうだな。と呟くと場を静寂が包み込む
ここまでくれば流石に４人も不自然に思い、頭の中で思考をめぐらせる

「あの、織斑先生・・・」

「何だ、篠ノ之？」

「もう1人・・・アーチャーと呼ばれた男がいました
福音と戦っている時に見た白髪で赤い衣を纏った長身の男が」

箒がそう告げると、全員が目を見開いて箒の方を見る

「そいつは私も確認した。その時、そいつは誰かといたか？」

「いえ、1人でした。でもあれは・・・」

1人だった・・・と言う事は箒はアーチャーが束と一緒にいた事を知らないのだろう
千冬は束とアーチャーの事について話すべきか、と迷ったが結局やめた

束とアーチャーについて話し、さらに場を混乱させても良くはないと判断したからだ

「ちょ、ちょっと待ってください教官！！
アーチャーまで確認したということはまさか・・・・」

「ああ、おそらくいるだろうな
残りのセイバー、ライダー、アサシン、バーサーカーも」

その言葉に全員が息を呑む
見事に千冬の言った7つの単語に名前が当てはまっている
ここまでくると偶然、変な名前の人がいる。だけではすまないのだ

「ところで篠ノ之、お前はアーチャーを見たそうだが・・・その時何を感じた？」

「正直に言えば、怖かった・・・です
情けない話ですがあれにはＩＳに乗っても勝てる気がしません・・・」

「お前の反応は正しい。私ですら正直、アイツとは戦いたくない
アーチャー、いやあいつらの誰かと戦えば確実に私が殺されるだろうからな」

「何を弱気な！！そんな奴らに教官が負けるはずが・・・」

千冬の言葉にラウラは反論しようとするが
臨海学校の終日、ランサーに千冬が敗北したのを思い出して言葉が止まる
そのせいで話が一瞬とぎれたが、千冬は5人の顔を見渡すと再び話

を続ける

「いいか、一夏はお前らにも、そして私にも何かを隠している
おそらくそれは何か私達の常識で測れないようなとんでもない事だ
だからお前らにその事を調べる協力をしてもらいたい。このとおりだ」

千冬はそう言うと、5人に対し頭を下げる
その行動に少しフリーズした5人だが、すぐに千冬の頼みを了承した

千冬に協力する事にした5人は生徒指導室を出ると真っ直ぐに自分の部屋へと戻る
その瞳には一夏に対する疑惑と怒り、悲しみなど様々な感情が映し出されていた

積み重なる疑惑（後書き）

今回は原作ヒロインズの話
いやぁ・・・流石にあそこまで束さんに言わせちゃったし
千冬姉なら確実に一夏の事を調べるよなぁ・・・と思って書きました
狐と主人公＋青色コンビについては今回出番無しです

恋に騒がす七重奏・前編

「・・・最近、皆がおかしいんです」

「は・・・？」

夏休みも数日が過ぎ、夕方の第二整備倉庫で
打鉄弐式を整備していた簪は突然来訪した一夏が言った言葉に混乱した

「え、ええと・・・
ちゃんと順を追って説明して・・・？」

「だからっ！！このごろ皆がおかしいんだよ！！」

簪はそう叫ぶ一夏を落ち着かせて話を聞く
話を要約すると、このごろ一夏の周りにいる人の態度がおかしいと言う事だった

「なんか皆が優しいんだよ！？
俺に料理を作ってくれたり、部屋の掃除を手伝ってくれたりさ！！
間違って着替えを見ちゃった時も殴られるはずが笑って許してくれたんだぜ！？」

ー　イラッ

何か自分の心にどす黒い物を感じた簪はランサーに念話で問いかけた

（ランサー・・・一夏は何が言いたいのかな
私にはイチャついてるのを自慢してるようにしか聞こえないんだけど？）

（マスター落ち着け、とりあえずその右手に持っているスパナを下に置け）

その言葉に簪は渋々とスパナを下に置き、再び一夏の方を向きなおす

「それで一夏？・・・いいたい事はそれだけ？」

（マスター、笑顔が怖いんだが・・・）

「そうだった。今日来たのはそれだけじゃなくて・・・
簪さ、これから暇か？できれば俺の家に一緒に来てくれないか？」

簪はその言葉に完全にフリーズした

（家に？誰が？私が・・・誰の？・・・一夏の）

思考回路がショートする頭で必死に先程の言葉を再生する

俺の家に一緒に来てくれないか

「なっ、ななななななななな！？」

「どしたの簪？」

「いい、家っててわ、わたたたししがいち、一夏のっ！？」

「駄目か？どうしても２人きりで簪と話したい大切な話があったんだ」

「う、ううん。全然っ！？・・・・い、今からっ！？」

「ああ、できれば・・・」

「わかった！！今片付ける・・・・・！！」

そういうと簪は凄まじいスピードで整備器具を片付けて自分の部屋へと向かう

そしてそのままタンスから着替えを取り出し、風呂場に向かった

「一夏と二人きり、一夏と二人きり、一夏と二人きり、一夏と・・・」

（おい、マスター。マスター？お～い）

「ま、まだ付き合っても無いのに・・でも着替えは一応持ったし、だけど・・・」

（駄目だ。完全に聞こえてねぇ）

ランサーが必死に念話で呼びかけるが簪はそれに答えない

簪はシャワーを浴びた後、着替えを持ち一夏との集合場所へと向かう

「お、お待たせ一夏・・・」

「おうっ、じゃあ行くか」

待ち合わせ場所では既に一夏が待っていた
ちなみに簪は今まで家族とランサー以外の男と二人きりで外出などした事がない
それがいきなり気になり始めた男子の家に行くため頭の中は完全にショートしていた

そして数十分後・・・

「まぁ、入ってくれよ。狭いかもしんないけど」

「お、おじゃま・・・・します・・」

「千冬姉が帰ってくるのは明日だからな。安心してくれ
もう実体化していいぞ。キャスター、それにランサーも」

「ふぇ？」

「はぁ・・・霊体化してると疲れます」

「同感だ。学校じゃ下手に霊体化解けないからな
その分お前のマスターは同室の奴がいないからいいじゃねぇかよ」

ランサーは俺なんかなぁ・・・と下を俯いてため息を吐いている
簪と同室の生徒にバレるので部屋ですら霊体化を解けないのは流石に堪えるのだろう
一方、間抜けな声を出した簪はランサーとキャスターを見て固まっていた

「マスター、俺らもいる事を忘れるなよ
坊主と二人きりになれなくて残念だったな。着替えまで持って
k・・・」

「いいいいやぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!!!!」

「ん?着替えって何の事?」

「ご主人様は知らなくていいんですよ~」

叫ぶ簪をなんとか押さえ、4人はとりあえずリビングに集合する
一夏はタンスからコップを4つ出してそれに冷蔵庫から出したお茶を注ぎ
キャスターはそれをお盆に乗せてリビングまで運ぶ
一方、リビングでは簪が胡坐をかくランサーの隣で膝を抱えて何かを呟いていた

「一夏の馬鹿、一夏の馬鹿、一夏の馬鹿、ランサーの馬鹿、一夏の馬鹿、一夏の」

「待てマスター。俺も混じってなかったか?」

どうやら先程からからかったせいでランサーも怒りの対称になったらしい

「お待たせ。来ていきなりで悪いけど、話したいことがあるんだ」

そう言いながら自分の対面の席に座る一夏を簪はジト目で睨む
一夏はその視線に一瞬ひるんだが、話を続ける事にした

「実はこないだの臨海学校の事なんだけど
キャスターがアーチャーと会ったらしいんだ」

「何だ？お前らもアイツに会ってたのか」

ランサーの言葉に一夏はランサーたちもアーチャーと遭遇してた事を知る
それならそれで話が早いな。と一夏は一瞬だけ思考するとすぐに話を再開した

「ああ、それでアーチャーのマスターなんだけど
もしかして俺達と同じＩＳ学園の関係者って事は考えられないかな？」

「ご主人様、それはないかと
それならば私の結界に反応がありますし・・・」

「私もそう思う・・・一応ランサーに警戒してもらってたんだけど
少なくとも旅館や帰りのバスでサーヴァントの気配は無かったらしいし」

「アーチャーのマスターについては情報無し・・・か
ひょっとして簪さんやランサーの方で何かわからないかと思ったんだけど」

「・・・ごめん」

「い、いや謝ることないって！！
俺達だって全くアーチャーについて分からなかったんだし」
落ち込む簪を慰める一夏。その後もアーチャーの事
それから学園にもし、敵が攻めてきた時どう対処するかなどを話した
ひとしきり話も終わり、一夏が腹が減ったな・・・と呟く
キャスターは自分の麦茶を一口飲むと時計を見て、一夏に話しかけた
「ご主人様、もうお夕食のお時間を過ぎていますよ？」
「本当だ、もうこんな時間か。どうりで腹が減るわけだよ
俺が何か作るから、簪さんとランサーも夕飯を食べてってくれ」
一夏にそう言われ、簪は時計を見る
壁にかかっている時計の針は現在の時刻、８時半をさしていた
「もうこんな時間・・・・」
簪は時計を見て、誘ってくれた一夏には悪いが断ってＩＳ学園に帰ろうとする
だがそれは隣に座るランサーによって止められた
「ランサー、何してるの・・・？もう帰らないと・・・」
「駄目だマスター。食事を誘われた以上、それを受けねぇとマズイ
もし断ったら誓約（ゲッシュ）によって俺のランクが下がっちまう」
簪はそれはまずいと思ってランサーに渋々と従う
少しだけならいいか・・・と思ったが、すぐに後悔した

一夏が料理を作ってそれを食べ終わる頃にはもう時計は9時を過ぎていたのだ

「どうしよう・・・・・」

簪は悩む。このままＩＳ学園に帰るのはマズイ
もう寮の門限をとっくに過ぎている。このまま帰れば反省文どころではすまないだろう
一応、妙な期待をしてしまったせいで外泊許可は出している
このまま更識の家に帰るにも時間がかかりすぎる。いったいどうするのか・・・

ランサーは頭を抱えて四苦八苦する己のマスターを見て、続けて一夏に視線を向ける

「なぁ、坊主。俺らって今日、この家に泊まってってもいいか？」

「「なぁっ！？」」

ランサーが言ったその言葉にキャスターと簪が叫び声をあげる

「ん？別にいいぞ」

「「一夏ぁぁぁぁっ！？（ご主人様ぁぁぁぁっ！？）」」

「ら、ランサーッ！？何でそんな事になるのっ！？」

「いや、マスターは寮に戻れないし・・・家に帰るのもできねぇだろ？

だったらここに泊まるのが一番いいだろ。せっかく着替えも持

ってきてんだし」

ニヤニヤ顔でそういうランサー。現在の状況を面白がってる様子がよく見て取れる

（た、楽しんでる・・・絶対にコイツ、楽しんでる・・・・）

そう思った簪は一夏の方に視線を向ける

だが一夏はキャスターに胸倉を掴まれ、頭を前後に揺さぶられていた

「何でですかご主人様！？

せっかく二人っきりなんですよ！！私との新婚夫婦生活は！？

一緒に料理を作ったりとか、買い物とか、お洗濯とか、夜の営みはぁっ！？」

「きゃ、キャスター・・・離し・・・首・・苦し・・・」

「うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁん！！！！」

泣きながら叫ぶキャスター。一夏はどんどんと顔が青白くなってきている

「はっはっはっ。大変だな坊主」

原凶（ランサー）が愉快そうに笑う

その笑いを聞いた瞬間、簪とキャスターの間で一瞬のアイコンタクトが交わされる

（強化、自分、します、思う存分、殺ってください）

（了解、まかせて）

キャスターの強化により、簪の拳が強化される
そしてそのまま、高笑いするランサーの元に向かい・・・

「ははははははh・・・・ん？「バキィッ！！」おぶろぉっ！？」

見事にランサーの顔面にその拳が突き刺さった

「・・・壊してやる」

そういう簪の瞳に光は無い。完全に怒り狂っている
そして倒れたランサーに打ち込まれる拳、拳、拳

簪がランサーを殴っているその頃、キャスターは窒息した一夏の蘇生をしていた

「じゃ、じゃあキャスターと簪は俺の部屋のベッドを使ってくれ
狭いとは思うけど我慢してくれな。俺とランサーはリビングで寝るから」

ようやく蘇生した一夏は簪とキャスターにそう告げると食器の片づけを始める
その横では顔を腫らしたランサーがソファーにうつ伏せに突っ伏していた
一夏の言葉に頷いた簪とキャスターはそのまま2階の一夏の部屋へと向かう

部屋へと入った二人は、若干気まずそうにしながら辺りを見回す
そしてお互いの視線があった瞬間、二人同時に笑い出した

「・・・あはははっ、すいません。ランサーのマスター」

「ふふっ。・・・簪でいいよ、一夏もそう呼んでるし」

「そうですね。これからはそう呼ばせてもらいます」

そう言いながら二人は笑いあう。そしてそれから色々な話をした
一夏と出会った時の事や自分の好きな事など、たくさんの事を
話が終わる頃には聖杯戦争の敵や同盟者相手ではなく
二人とも相手を単純にお互いを自分の友人として見ていた

夜が更ける。明日の騒動など知らずに４人は静かに眠りにつくのだった

ー　オマケ

「こう・・・？キャスター」

「ううむ・・・悪くはありませんがここの藁をこうした方が効き目があるかと」

「・・・こうかな？釘の刺す場所はここでいいかな・・・？」

「大丈夫です。上手いですよ、簪さん。はじめてとは思えませんよ」

「そ、そうかな・・・・？」

「あ、でもその板を貫通しないように気をつけてくださいね？」

「・・・わかった」

「・・・・・・・・ッ！？」

「ラ、ランサー！？いったいどうしたんだ！！
突然胸を押さえて苦しんだりして、え？呪いっｔ・・・ちょっ、ランサー！？
死ぬな！！死なないでくれぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇっ！！！！」

恋に騒がす七重奏・前編（後書き）

おまけはその場のノリです

恋に騒がす七重奏・中編

簪が一夏の家に泊まった翌日の朝、一夏はランサーを起こして朝食を作っていた

「ランサー、これテーブルに運んでもらってもいいか？」

「了解だ。これで最後か？」

「ああ、俺は簪たちを起こしてくるから座って待っててくれ」

「わかった。早くしてくれよ？

それとマスターの起こし方はさっき説明したとおりだからな」

一夏はエプロンを取り、簪たちを起こすために2階へとむかう

そして自分の部屋の前に立ち、その扉を2、3回ノックする

「まだ寝てるのかな・・・？」

そういいながら一夏はドアを開けて中に入る

するとそこにはベッドで寄り添って寝ている簪とキャスターの姿があった

（枕元にある釘の刺さった藁人形については突っ込まない事にしよう）

一夏は昨日の夜のランサーを思い出して軽く身震いする

「気持ちよさそうに寝てるなぁ

ちょっと可愛そうな気もするけど・・・
ランサーを待たせるのも悪いし、ランサーに聞いた起こし方を試すか」

ベッドの横に座った一夏は少し息を吸い込むと簪へと自分の顔をゆっくりと近づける
一夏の顔が簪に近づく。その距離はどんどんと縮まり、そして・・・

「スゥウプァァァァヒィィィィルォォォォターーーイム!!」（高音巻き舌）

ー　ガバァッ!!!!

「ふぎゃっ!?」

一夏の言葉に簪が凄まじい速度で飛び起きる
キャスターは飛び起きた簪によって布団から転げ落ち、間抜けな声をあげた

「あ、ほんとにすぐ起きたな」

「・・・・・一夏?」

簪はまだ寝ぼけているのか、隣にいる一夏を見て目を見開く

そして昨日一夏の家にとまった事を思い出し、次に今の自分の姿を確認する
今の自分の姿は昨日持ってきたパジャマ。それに対しては特に問題は無い
だが今は寝起き、しかも飛び起きたとなればパジャマがはだけるのも当然だ
そして再び自分の目の前にいる一夏へと視線を向ける
一夏もようやくその事に気がついたのか赤い顔をして簪から視線を逸らしていた
その事を簪が理解してから数秒後・・・

「ーーーーーーーーーーーーーッ！！！！！！！！！」

朝早くの織斑家に1人の少女の声にならない悲鳴が響き渡った

「まったく。ご主人様にも困ったものです」

キャスターはそう言いながら朝食に使った食器を次々に洗っていく
簪はその呟きを聞いて頬を赤らめながら、受け取った食器を棚にしまっていた
現在、朝食を食べ終わった一夏はランサーとホームセンターへと買い物にでかけている

何でも買い物は男に任せておけ・・・ということらしい
一夏の事だから女の子に荷物を持たせるわけにはいかないとでも思ったのだろう
そして留守番につく簪の護衛としてキャスターも残る事になったのだ

朝食の片付けも終わって洗濯も終盤に差し掛かる中、インターホンが鳴った
一夏とランサーだろうか。だが二人にしては帰りが速すぎる
と言う事は宅配便かなにかの可能性が高いが、無視する訳にもいくまい

「簪さん出てもらえますか？
もしかしたらご主人様かもしれませんし」

「わかった」

簪は頷いてドアへと向かい、そのドアノブに手をかけた

「・・・・・・・・・。」

シャルロットはドキドキとしながら、織斑とかかれた表札を見つめ

ている
そして数回ほど深呼吸をした後、震える指でインターホンをゆっくりと押した

（だ、大丈夫・・・だよね。いきなり押しかけちゃったけど・・・
もしかして2人きりなら僕に話してくれる事もあるかも知れないし）

一夏が何か隠しているのは専用機持ちメンバーの全員が知っている
そのため全員は千冬から話を聞いた後、密かに同盟を組んで一夏の秘密を探っていた

（一番は一夏が自主的に話してくれる事なんだけど・・・
まずは皆で一夏に優しく接して聞き出そうとしたのに失敗したしなぁ）

その時の一夏の顔が目に浮かぶ。あれは完全にこちらを疑っている顔だ

（箒や鈴も怒っても手を出さないように必死に頑張っていたのになぁ・・・）

シャルロットがそう思っているとドアが開く音がした

「はい、織斑ですけｄ・・・」

「おはよう。いちｋ・・・・」

お互いの視線が交差し、完全に時が停止する

（な、なんで一夏の家に女の子がいるの・・・？
しかもこの子って臨海学校の時にあの人たちといた子じゃ・・・・）

（・・・・・・ど、どうしよう）

「簪さん、どうかしたんですか？」

やがて戻ってこない簪を疑問に思ったのか
その言葉と共にキャスターがリビングから顔を出した

（あの人・・・キャスターさん！？）

一夏の家に千冬が言っていた7人の1人がいる事にシャルロットはますます混乱した
アーチャー、キャスター、ランサーの三人
この数日で行方を捜していたが全く行方がわからなかった人物がそこにいるのだ

「あれ。シャルじゃん
何してんだ、こんなところで？」

「い、一夏ぁっ！！」

シャルロットに後ろからかけられる一夏の声
この訳のわからない状況から一刻も早く抜け出したかった
シャルロットはその声に助かったとばかりに後ろを振り向く
だが、その一夏はアロハシャツを着た男・・・ランサーと一緒にいた

「なんだよ、来るなら来るって連絡してくれればいいのに」
「ななななななななななな！？」
にこやかに笑う一夏とは対象に
シャルロットはあんぐりと口を開け、ランサーを指差して固まっている

（ど、どどどうしてこの人たちが一夏の家にいるの！？）

一夏にリビングへと案内されたシャルロットはものすごく混乱していた
ランサーやキャスターについては一夏の家に到着してから
二人きりになったところで一夏からゆっくりと聞き出す筈だったのに台無しである

いっその事、この場で捕まえて説明させるかとも一瞬思ったがすぐにその考えを改めた
相手は千冬でさえ恐れる相手である。たとえＩＳを使っても自分じゃ勝ち目はないだろう

同じくリビングに座っているランサーたちに視線を移す
二人ともその探るような視線に気がついたのか、シャルロットの事を警戒していた

（うう・・・完全に警戒されてる・・・
そうだ、ここはいっその事フレンドリーにさりげなく聞いてみ

よう）

「そ、そういえばランサーさんとキャスターさんはその名前が本名なんですか？」

「「そうだが（ですけど）？」

「い、いや。いいお名前ですよねっ。他のご兄弟のお名前も似てるんですか

例えば・・・・アサシンさんとかアーチャーさんと・・・か・・・！？」

シャルロットはそこまで言った時点で言葉を止める。いや、止められた

自分の顔のすぐ手前、そこに槍が突きつけられている

そして槍の穂先から柄、それを持っている人物へと順に視線を移す

人物へと視線を移したシャルロットは先日に千冬と箒が言っていた言葉を理解した

声をあげる事すらできない程の強大な威圧感

共に感じるとてつもない殺気。それらをこめた自分を見るその真紅の目

勝てない、勝てるわけが無い。目の前にいるのは人間じゃない

少なくとも自分はこんな威圧を放つ人間に会った事が無い

「貴様・・・それを誰から聞いた・・・？」

「え、あ・・・・う・・あ・・・・・」

「ランサー、お前シャルに何して・・・・！？」

「ご主人様お静かに。ここは下がっていてください」

ランサーの行動に驚き、立ち上がろうとする一夏
だが、それは隣にいるキャスターによって阻止された

「何で止めるんだキャスター！！シャルが何をしたっていうんだよ！？」

「先程この子が何と言ったか覚えているのですか？
アサシン、それにアーチャー。サーヴァントのクラス名を知っているんですよ？
偶然知ったのか、誰かに聞いたのか、もしかしたら参加者なのかもしれません」

「でもだからって・・・・」

ー　ピンポーン

「「「「「・・・・・・・・ッ！？」」」」」

そんな緊迫した空気を壊すように呼び鈴の音が鳴り響く
あまりにも狙ったようなタイミングに一夏たちは警戒を強くした

「一夏・・・・どうする？」

「俺が出る、キャスター着いてきてくれ」
キャスターと一夏がリビングを出て、玄関へと向かう
簪とランサーは玄関の様子に気を配りながらシャルロットへの警戒を怠らない
シャルロットは槍を突きつけられたまま、まだ動けないでいた

「セ、セシリアッ！？」

「い、一夏さん！！どうしてその方と一緒にいるんですの！？」

玄関からセシリアの声が聞こえる
どうやら彼女も一夏の家に遊びに来たようだ
その声を聞いたランサーは軽く舌打ちをすると槍をしまう
ようやく死の恐怖から解放されたシャルロットは冷や汗を大量に流して震えていた

「嬢ちゃん。この話は後でな
それと他言無用だ、破ったら嬢ちゃんを殺す
・・・とまではいかないが記憶を消させてもらう事になる」

ランサーの威圧のこもった言葉にシャルロットはコクコクと首を縦に振る
圧倒的なその恐怖にシャルロットはただ震えることしかできなかった

恋に騒がす七重奏・中編２

ー　ＳＩＤＥ　一夏

俺は織斑一夏。世界で唯一ＩＳを動かせるだけの普通の高校生・・・
だったのだが
ある日わけもわからずに突然、聖杯戦争ってのに参加する事になった
千冬姉や周りの人に迷惑をかけるわけにもいかないので誰にも教え
てはいない
俺の周りで聖杯戦争のことを知っているのは同じくマスターになっ
た同盟相手の簪のみ
彼女も俺と同じでイレギュラー、ようするに彼女も聖杯戦争に巻き
込まれたらしい

簪が聖杯戦争に参加しているのを知っているのも同じく同盟相手の
俺のみ
当然、それ以外の知り合いには教えていない。というより絶対に教
えられない

というわけで何とかここまでキャスター達の事を誤魔化してきた訳
だけど・・・

現在、俺の目の前にはもの凄く睨んでくる専用機持ちメンバーが座
っている
セシリアが来た少し後、ラウラ、鈴、それに箒が同時に俺の家にや
ってきたのだ
家にくるなら１人ぐらい連絡してくれてもいいと思うんだけどなぁ・

・・

そう思いながら皆の顔を見回すが・・・どう考えても怒ってるよなぁ

簪たちは現在隣の部屋だ。つまり俺に対するフォローは期待できない

何故ならさっきの事が原因でランサーとキャスターがいるとシャルが怯えるのだ

なので現在はリビングの隣の部屋に簪と一緒に移動してもらった

ホントどうしたらいいのかお手上げだ。特にシャルには

キャスターが言うには記憶操作して記憶を消すのが一番いいらしいのだが

俺はシャルに・・・友達にそんな事はしたくない。裏切ったみたいで嫌だしな

「はぁ・・・いいかげん不機嫌そうな顔やめたほうがいいぞ。疲れるだろ？」

「だ、誰のせいよ！！誰の！！！！」

鈴が机を叩きながら身をのりだす

「何であの人らがここにいんのよ！？

せっかく私達が遊びに来たって言うのに！！」

「だから簪たちは俺の家に遊びに来てるんだって

第一、皆も遊びに来るなら一言ぐらい連絡くれよな」

「う・・・・」

俺の言葉に鈴が悔しそうな顔をしながら引き下がる

「それと皆さ、なんかランサーたちへの態度が変だぞ？
話してみると3人ともいい奴なんだし、普通に話してみればいいじゃんか」

そう言うと5人とも俺から目を逸らして視線を泳がせた
・・・なんでそこまでランサーたちと話すのが嫌なんだ？

「・・・ええぃっ、このままでは埒があかん！！
一夏っ、あいつらはいったい何者なんだ！！私達にも教えろっ！！！！」

ラウラが叫ぶ。・・・鈴と一緒で机をたたくのはいいけどお茶をこぼすなよ？

「いや、だから俺と簪の友達の兄妹だって
たしか臨海学校でも皆にそう言って説明したよな？」

「では、どこのお国の出身ですの？
年齢は？国籍は？それとご職業・・・などもお聞きしたいですわね」

ぐ・・なんかセシリアたちからもの凄い威圧が
でもランサーの出身地なんてわかんないしなぁ・・・キャスターは日本だけど

どうするものかと悩んで時計に目を移すと、もう１２時近くになっていた

「まぁ、それは本人に聞いてくれよ
おーい、ランサーたちもこっちに来てくれ。俺は昼飯の用意するから」

俺がそう言った瞬間、シャルと箒の肩がビクッと跳ね上がる
完全に怯えてるよなぁ、アレ。シャルはまぁ仕方ないとしても箒は何でだ？

しばらくして簪を先頭に3人がリビングへと入ってくる

「・・・一夏、何か手伝う事ある？」

「いや、客人にそんな事させられない
人数が多いから蕎麦にするけど、アレルギーとか皆ないよな？」

俺の言葉に全員が首を横に振る。・・・どうやら大丈夫のようだ
さて・・・張り切って作るとしますか！！

ー　2時間後・・・

「ぬぉぉぉぉ、また借金かぁぁぁっ！！」

「ああ、家が！！せっかく買った家がぁっ！！」

全員が昼食の蕎麦を食べ終わり、皆で暇つぶしに人生ゲームをやった・・・のだが、ランサーがものすごく弱すぎる。それはもうありえないくらいに

具体的に言うと、家を買ったら必ず炎上。進むと必ず近くの車に衝突し
あげくの果てにはゴッホの絵を買うマスに2回連続で止まるという・・・

その後も色々なゲームをやったのだが・・・運が絡むのはランサーが必ずどべだった
何かに呪われてるんじゃないのかランサー。実際に昨日は呪われてたけど
俺がランサーの惨状を見て苦笑いを浮かべる中、簪が俺の肩を軽く叩く

「あの、一夏・・・私そろそろ・・・」

「あれ・・・もう帰るのか？」

「打鉄二式の整備とかしなきゃいけないし・・・昨日はサボっちゃったから」

「そっか。じゃあ玄関まで見送るよ」

「ありがと・・・いくよ、ランサー」

簪はランサーを呼び、玄関へと向かった

（ご主人様、私も帰るふりをして霊体化しておいた方がいいです

か？）

（頼む。兄妹だと思われてるから一緒に帰らないと怪しむだろうし）

キャスターと念話で相談しながら玄関へと一緒に向かう

何かキャスターがいると箒たちもギクシャクしてるし、そっちのがいいだろう

「ん、マスター。坊主の部屋に置いてある着替えは持って帰らねぇのか？」

「・・・・・・・あ」

簪は着替えを忘れていた事に気がつくと俺の部屋へと向かった

着替え？ああ、そういえば昨日泊まった時の着替えか・・・

「「「「「一夏（さん）？」」」」」

後ろを振り向く。そこには絶対零度のオーラを放つ5人が・・・って何で！？

その目に光はなく、「後で話がある。逃げたら殺す」という意志が凄く伝わってくる

何だ！？俺が何をしたっていうんだ！！

キャスターもため息を吐いてないで、何か言ってやってくれ！！

「ごめん・・・お待たせ」

俺が心の中でそう叫んでいると簪が2階から降りてきた

そして、のまま玄関に向かい、玄関のドアを開けて3人が外に出る

・・・俺は家に入った後の恐怖に震えながら、簪たちを見送るのだった

恋に騒がす七重奏・後編１

「で、どういう事なのか説明してもらいましょうか一夏？」

「な、何を説明すればいいんだ？」

「ど・う・し・てアンタの部屋にあの子の着替えがあったのかしら？」

リビングで仁王立ちする鈴の声が冷たく響く
ここは正直に答えた方が身のためだと思う。正直な気持ちって大事だよな

「それは昨日、俺の家に泊まった簪とキャスターが
俺のベッドで一緒に寝たからd「滅！！！！」うぼおっ！？」

「泊まったぁ？一・緒・に・寝・た・だぁ！？
いいかげんにしないと殴るわよこの馬鹿！！！！」

「も・・・もう殴って・・・」

「うるさいうるさいうるさい！！！！
知らない女の子を家に誘き出して
そのまま襲うような奴の言葉なんか聞くわけ無いでしょうが！？」

「これがクラリッサが言っていたＮＴＲ・・・
夫婦仲を完璧にぶち壊すと注意されて、最も恐れていた事が・・・」

一夏の反論も聞かず、鈴は机を叩きながら叫ぶ
ラウラは膝と両手を床について独りでブツブツと呟いていた
「ご、誤解だ！！俺はランサーとリビングで寝た！！
それとラウラ、そのクラリッサって人の言う事を信じちゃ駄目だ」
（大変ですね～、ご主人様も）
（そう思ってるんなら何かいい解決策を考えてくれ！！）
その後も5人に簪たちとの事を質問されながら騒ぎ
時刻が４時を過ぎたところで唐突に予想外の人物がやってきた
「何だ。騒がしいと思ったらお前達か」
箒たちにキャスターたちの事を教えた織斑千冬、その人である
「あ、千冬姉おかえり
ご飯食べた？まだなら何か作るけどリクエストある？」
「馬鹿者、何時だと思っている。流石に食べたぞ」
一夏は助かったとばかりに千冬に近寄り、カバンを預かる
「お茶でもいれるよ。熱いのと冷たいの、どっちがいい？」
「そうだな・・・冷たいのでも」

そこまで告げた時点で千冬は言葉を止めた
目の前にいる女子5人の目線が羨ましい・・・と語っていたからだ

「・・・いや、やめておこう
どうせまた仕事ですぐ出て行くからな」

「そっか、朝に作ったコーヒーゼリーそろそろ食べれるのに」

「また今度もらうさ、では着替えてくる」

「あ、千冬姉の部屋に秋物の服とかスーツを纏めたバッグが置いてある
布団の横に着替えと一緒に置いておいたから忘れずにもって行ってくれよ？」

それを聞くと千冬は「母親のような事をする奴だな・・・」と呟こうとし、やめた
女子たちの「何か夫婦みたい・・・」という思考を読み取ったからだ

バタンとドアが閉まり、千冬がリビングから出て行く
それを見た女子ズは千冬に対する一夏の態度に言いようの無い不安が渦巻いていた

（一夏の奴・・・前よりシスコンぶりが酷くなってないか・・・？）

（織斑先生、本当に一夏さんを弟として見ているだけなのかしら）

（一夏のシスコン！！女の子を家につれこんでおいて・・・）

（な、無いよね。二人だけの思いとか・・・そんなの無いよね？）

（一夏め・・・私の嫁のくせに・・・
しかし教官は－　いや、教官と言えど私の嫁が私以外に愛想良くするなど
それにあの女２人にも・・・ま、まさかこれがＮＴＲ効果と言う奴か！？）

（うーむ、ご主人様がシスコンとは・・・
まぁ私の魅力で虜にしちゃえば無問題なんですけど
あの方は私のお義姉様になる方ですから呪いをかけるのはやめておきましょう）

そんなこんなでおかしな沈黙にリビングの空気が重く停滞する

「・・・え、あれ？なんだよ、どうした？」

「・・・ゼリー」

「ん？」

「ゼリー出しなさいよ！
三時のおやつも出さなかったくせに、腹立つ！！」

「な、なにキレてるんだよ？
鈴・・・だいたいお前、コーヒー嫌いじゃなかったか？」

「コーヒーゼリーは好きなのよ！！」

「ええ？前にいらないって・・・」

「好きになったのよ！最近！文句ある！？」

「いや、ないけどよ・・・」

君子危うきに近寄らずの精神で鈴を回避しようとした一夏
だが、今度は逆サイドに座っていた箒から言葉をかけられる

「そ、その・・・私もコーヒーゼリーは好きでな。味見してやろう」

「そうか、味見はひつようだな
嫁の料理の腕前を把握するのも夫の務めだ。私も味見をしよう」

「そうですわ！私も味見をして差し上げます！！」

「い、一夏・・・僕もいいかな？」

箒の言葉にラウラ、セシリア、シャルロットと続き一夏はため息をはいた

「お、おいおいシャルまで・・・まずくても文句言うなよ？」

一夏はやれやれといった感じで冷蔵庫からコーヒーゼリーを取り出すため
キッチンへと向かい、冷蔵庫の中からコーヒーゼリーを取り出しリビングへと戻る
そして皆にゼリーを配ろうとした一夏の脳裏に、今朝の出来事がフラッシュバックした

ー　一夏　回想中・・・

「ご主人様ご主人様。いったい何をなさっているのですか？」

「ああ、コレか？これはコーヒーゼリーを作ってるんだよ
俺と千冬姉とキャスター、それに簪たちの分あわせて５個な」

「デザートもお作りになれるとは・・・流石は私のご自慢の旦那様ですっ！！」

「はは・・・まぁ、楽しみにしててくれよ？」

「はいっ、ご主人様が私のために作ってくださった甘味・・・
無駄にすることなどできません。私・・・感激で泣いちゃいそうです」

「ははははっ、大げさだなキャスターは」

・・・回想終了

もう一度、コーヒーゼリーの数を確認してみよう
一夏が作ったゼリーの数は自分、千冬、キャスター、簪、ランサーの分の計５個
目の前にいる専用機持ちメンバーの人数も・・・ちょうど５人

自分と簪、それにランサーの分を引いても余るのは3個
千冬も・・・まぁ、出かけると言っていたのでたぶん食べないだろうからこれで4個
コーヒーゼリーを食べたいと言っているのは残り6人・・・1個たりない

もうリビングに持ってきているのでゼリーの数を誤魔化す事もできない
そうなると必然的にここにいる5人に5個のゼリーを配る事に。ということは・・・

（キャ、キャスター・・・・・さん？）

（・・・・・・・）

そう、必然的に霊体化しているキャスターの分が無くなると言う事である

（ついに馬脚をあらわしたな、ご主人様にたかる愚か者・・・
ご主人様に近づき、人の楽しみを奪うとかもう殺しあうしかねー！！
ふふふ・・・・この愚か者どもが。お白州裁きを受けやがれぇぇぇぇ！！！！）

（ちょ、ちょっと待ってくれ！！ひとまず落ち着こう！？いや、マジで！！！！）

（くっくっくっ、まずは手始めに怪しいあの金髪に・・・
そうです。これで1人いなくなればご主人様も安全。ゼリーも復活です）

シャルが、シャルがマズイ！！
くそぅっ、このままだと誰かが酷い目に・・・
そうだ！！千冬姉の分とか言って、１個取っておいてもらえば！！
一夏はトレイの上においてあるコーヒーゼリーに目を移すが・・・
１個も無かった
そして目の前には美味しそうにゼリーを頬張る５人。実に幸せそうである

（トイレで実体化して・・・鍵をかけて、腹を下させて・・・ふふふふふ）

「やっべぇ、俺トイレ行きてぇ。めっちゃ行きてぇなぁ！！
しかも大きいほうだ、こりゃしばらく出てこないな！！じゃ、というわけでっ！！」
一夏は突然そう叫ぶとトイレに向かって全速力で駆け出した

（何を叫んでるんだろうなぁ・・・俺）

叫んだ時に見た専用機持ちメンバーの顔を一夏は一生忘れないだろう
表面上は優しく微笑んでいたが、口元は全員引きつっていた
一夏は悟った。人を気遣って逆に傷つける事もあるんだなぁ・・・と
そして、キャスターが実体化し鍵をかける直前になんとかトイレに滑り込んだ

「落ち着けキャスター、コーヒーゼリーはまた今度作ってやるか

ら！！」

「嫌ですっ！！今日と言う今日は我慢がなりません！！！！」

小声で口論する一夏とキャスター。無論トイレに2人で入っているのでその距離は近い

「ご主人様はっ、私の旦那様なんですよっ！！

モテているのはご主人様が魅力的だから・・・と我慢していましたが

そろそろ良妻賢母のわたしといえども限界ですっ！！」

「俺のどこがモテてんだよ！？

ごめん、本当にごめん！！お詫びに俺にできる事ならなんでもするから！！」

キャスターは半泣きになりながら一夏をポカポカと叩く

何とかなだめようと一夏が言った言葉を聞いてキャスターの耳がピクンと動いた

「何でも・・・・？」

「お、おう。男に二言はねぇっ！！」

「じゃ、じゃあ・・・今日の夜、私の事を抱きしめながら寝てもらえますか？」

「いや、それは無理」（即答）

「・・・・うわぁぁぁぁぁん！！呪ってやる！！呪ってやるぅぅ

うっ！！！！」

「待て、キャスター！？今の嘘！！
キャスターの言うとおりにするから！！約束どおり言う事聞くからぁっ！！」

一夏は藁人形を取り出し、壁に打ちつけようとするキャスターを羽交い絞めにする

「嘘ですっ！！即答したくせにぃっ！！」

「いや、だって色々と問題あるだろ！？恥ずかしいし！！」

「私は大丈夫ですっ！！」

「そういう問題じゃないと思うぞ！？」

一夏はトイレでキャスターを何とか説得し続ける

その頃、2階にいた千冬は着替えを終えて
一夏の用意したバッグを持って部屋を出ようとしてある事に気がついた

「これは・・・」

それは棚に置いてあった一つの石
自分がこの家を出る前は確かに小さいガラスケースに入っていた筈だ

「掃除するときにでも落としたのか？
まぁいい、一夏に後で聞いてみるか・・・」

そう思いながら千冬は自らの部屋を後にするのだった

恋に騒がす七重奏・後編2

（・・・気まずい、何だこの空気）

何とかキャスターの説得を終えた一夏は現在、リビングに戻ってため息を吐いていた
原因は女子ズの視線が妙に優しかったりするからだが
そうなった訳は自分が叫んだ言い訳のせいなので、ぶっちゃけ自業自得である

「一夏」

廊下の方から自分を呼ぶ声が聞こえる
振り向くとそこには小さな台座に乗った石を持った千冬が立っていた

（あれ？あの石どっかで見たことあるような・・・）

千冬の持っている石を見て一夏は妙な慨視感を覚える

「お前この石を掃除の時にでも落としたのか？
最初はガラスのケースがあったはずなのに無くなってるんだ」

（ご主人様、あれってたしか私の召喚媒体じゃ・・・・）

「あ・・・・」

キャスターの言葉に忘れていた記憶が呼び覚まされる
そうだ、あれは確かキャスターと始めてあった時に棚から落とした石だ

どうやって言い訳すればいいのか・・・素直に落としましたというか

「・・・教官、一つ聞きたいのですが。その石は？
台座が付いているところを見るとどうやら貴重な石のようですが」

「これは昔、知人から譲り受けた者でな
どこで手に入れたのかは知らんが、何でもこの石は殺生石の欠片らしい」

「殺生石・・・というとあの殺生石ですか？九尾の狐の」

ラウラの質問に答える千冬姉
その言葉を聞いて箒が質問する。さすが親戚が神社だけのことはある
神楽舞などもやるので、もしかしたら箒は日本の神話などには詳しいのかもしれない

「へぇ～、ところで九尾の狐って・・・何？」

シャルが初めて聞いたのか、九尾の狐と言う言葉に首を傾げる
その隣ではセシリアとラウラがウンウンと頷いていた

「そうか、外国だとそんなに有名ではないからな
鈴はわかっているようだが九尾の狐の話を知っているのか？」

「当然。中学の途中までは日本にいたし・・・
九尾の狐の伝説は中国でも有名よ？日本と中国の両方に伝承があるし」

「そんなに有名なのか？その「キュービノキツネ」というのは」

「有名も何も日本の三大妖怪の一つだな
尾が九本ある狐の妖怪でな。妖怪の狐・・・妖狐というんだが
その妖狐にも所謂いい狐、善狐と悪い狐の野狐という2種類がいるんだ
善狐は神社でよく祀られるんだ。例えば稲荷とかがそうなんだが・・・
九尾の狐はその逆。野狐の中でも最も上格で妖狐の中でも最強といわれてるんだ」

すげぇな、箒。まさかワンブレスで言い切るとは・・・
しかもめちゃくちゃ詳しい。でも三大妖怪とか普通の女子高生は知らないと思うぞ

「まぁ、そいつが美女に化けて男を騙して操って好き放題やったって訳
日本の伝説では結局、陰陽師に正体がバレて退治されたらしいわ
それでその九尾の狐が死んだ場所に残ったのが殺生石って石なのよ」

「そうですか・・・とんでもない悪だったのですわね、その狐は」

・・・そう、鈴の言っている事は正しく日本に語り継がれている九尾の狐の伝説だ
九尾の狐の伝説はほぼ全てが九尾の狐が悪として語り継がれている
だがタマモの過去を見た俺はその伝説が嘘だという事・・・
九尾の狐が本当は人に恋をした神様だという事を俺は知っている

タマモは先程から口を開かない
自分がこんなにも悪く言われているんだ。無理もないだろう

どうしてタマモがこんなにも悪く言われなくちゃならない
どうしてタマモを・・・九尾の狐が悪だと決めつけられる
「俺は・・・九尾の狐が悪だなんて思わないな」
セシリアの言葉に少し間をおいて呟く
すると俺の言った事が以外だったのか全員の視線が俺の方に向いた
「どうして？だって美女に化けて男の人を騙してたんでしょ？」
「確かに九尾の狐は美女に化けてた・・・
でもそれは相手を騙すためじゃなくて、その相手を好きだったからじゃないかな」
シャルが俺の言葉に疑問を抱いたが、俺はそれに答えつつ言葉を続ける
「1人の神様が1人の人間に恋をして
その人間の傍にいるために人間の姿に化けたんだ
ずっと好きな人の傍にいたくて、好きな人と一緒に生きたくて
・・・・って、どうしたんだ？全員、鳩が豆鉄砲くらった様な顔してさ」
「いや・・・その、お前の口からそんな言葉が出るのが意外だったというか」
「まさか一夏さんのお口から恋なんて言葉を聞くとは・・・」

「アンタ、熱でもあるんじゃないの？変なものでも食べた？」
「意外とロマンチストなんだね。一夏って」
「ふむ。これがギャップ萌えというやつか」
5人の言葉に自分が何を言っていたのかようやく理解する
真実を知っているから思わず言ってしまったが、冷静に考えると物凄く恥ずかしい
顔の温度が熱くなっていくのがわかる。今、鏡を見たら顔が真っ赤になっているだろう
その後、千冬姉がでかけてからも散々5人にからかわれた
自分から言っておいてなんだけど、夕食の時にもからかうのはやめてほしい
結局、全員が帰るまでからかわれ続けた俺は精神的に物凄くまいっていた
そういえばさっきからタマモの姿が見えない
もう全員帰ったから霊体化を解いても問題ないはずなのに・・・
念話を送っても返事が無い。もう寝てるのか？
とりあえず風呂に入り、二階の自分の部屋へと向かう
ベッドでタマモが寝ている・・・と思ったのだが、タマモの姿は無かった
タマモを探すため、部屋を出ようとするが背中に何かあたった感触がする
それと同時に腹部に手が回され、背中から抱き疲れるような格好になった

「・・・ご主人様」

「タマモ・・・か？」

俺の背中に抱きついているのでタマモの顔は俺から見えない
だが、背中越しに聞こえたその声は少し震えていた

「タマモ、泣いてる・・・のか？」

「少し・・・。でも悲しくはありません
ご主人様は今日、私を庇ってくれました。泣きそうになった私を守ってくれました
こんなに優しくて、愛おしい旦那様と会えて。タマモは・・・幸せものです」

思わず微笑みがこぼれる
照れくさくて、タマモが嬉しそうで自分もつい微笑んでしまう

「私はずっとご主人様の傍にいます
この水天日光天照静石、邪な私利私欲で砕け散るその時まで
貴方の守をつとめましょう。ですからどうか、私と共に・・・」

「ああ、ずっと一緒にいような。タマモ、俺たちはずっと仲間だ」

「・・・・・・。」

「あ、あのタマモさん？何か締め付ける力がだんだん強く
・・・・って折れる折れる！！俺の腰の骨が危険な状態にいっ

！？」

ヤバイ！！腰骨がミシミシいってマジで折れる！！本当に折れる！！！！

「仲間ってなんですか、この雰囲気になってまだそんな事をほざきますか

ああ、そういえば今日はご主人様を抱きしめて寝るという約束でしたね

では寝ましょう。安心してください夜中の間、私はずっとこうしてますから」

どんどんと声から感情の色が消えていくキャスターの言葉を聞きながら

俺の意識は少しずつ闇へと沈んでいき、その数分後から俺の記憶は途絶えたのだった

番外編　青と蒼の邂逅（前書き）

連載２０部＆お気に入り登録１３０件突破記念で番外編を書きました
更識の家については原作に描写が無いので
勝手に想像して書いてますが、その点はご了承ください

番外編　青と蒼の邂逅

「簪ちゃん、いっしょにあそぼっ」

とても懐かしい声を聞いた気がした
目を開けて辺りを見回せばそこは学校の週末を利用して帰宅した更識の家
その家で私の手を引いて、遊びに誘ってくる小さい頃のお姉ちゃんの姿
・・・・そんな懐かしい夢を見た

寝起きでまだボーっとする頭を左右に振り、洗面所へと向かう
何であんな夢を見たんだろう・・・

私は・・小さい頃から何でもできる姉と比べられてきた
何で貴方はお姉さんと違うのと何度も言われ、それが嫌で嫌で何度も泣いた
周りが見ているのは更識盾撫の妹としてで誰も私自身を見てはくれない
友達でも私自身を見てくれるのは親友の布仏本音だけ
他の人はどうしても私とお姉ちゃんとを比較する。私は私、お姉ちゃんは関係ないのに

だから私はＩＳ学園に入るのも反対だった
あそこにはお姉ちゃんがいる。だからまた比べられそうで、また私は独りになりそうで
だけど、結局私はＩＳ学園に入学する事になってしまった

ＩＳ学園に入った私を待っていたのはこれまでと同じで退屈な日常だった
本音ともクラスが別れ、倉持技研が開発していた専用機も途中で投げ出された

お姉ちゃんが専用機を自分で組み上げたのに対抗しようとしたが一向に完成しない
このまま私はお姉ちゃんの影に隠れて生きるしかないのだろうか

「・・・・・・ッ！！」

暗くなった気分を払うように顔を洗う
駄目だ、こんな気持ちになっては。だからお姉ちゃんにかなわないんだ

顔を洗い終えた私は更識家にある倉庫へと足を運んだ
更識家の倉庫にはいろいろな物がある。世界でも貴重なものがいくつかあった筈だ
それらの貴重な書物を読んで気分転換でもしよう

扉を開けて薄暗い倉庫の中へと歩みを進める
思えば小さい頃から私は嫌な事があるとすぐにこの中に隠れていたような気がする
階段を上がり、倉庫の２階にある少し広めのスペース
お姉ちゃんや本音も知らない、私だけの秘密の場所
天窓から差し込む光がちょうどスポットライトのようにこの場所をてらしている

近くにある本棚から本を取り出す。だけどその時に誤って隣の本を落としてしまった
そして下に落ちた本を拾おうと前かがみになって、本へと手を伸ばす

「・・・・・？」

その時、本棚の横にある荷物の隙間で何かが光った気がした
気になった私は荷物を横にどけて、そこに落ちていたものを拾う

「イヤリング・・・・？」

付着していた埃をはらうと、それは青い宝石がついたイヤリングだった
誰のだろう？ここに来るのは私以外には誰もいないはずなのに・・・
倉庫の掃除をしている時に誰かがつけていたものが偶然落ちていたのだろうか

・・・突如、風が吹いた。辺りにあった埃が宙に舞う
私は思わず目をつぶってしまい、風が収まるのを待った

「ゲホッ、ゲホッ。何だこりゃ埃か！？
なんてところで召喚しやがるんだ・・・少しはこっちの事も考えろよ」

しばらくして人の声が聞こえた
声からして男のようだが、更識の家にこんな声の人はいなかったはずだ・・・たぶん
私はその声の主が誰なのか気になってゆっくりと目を開けた

私やお姉ちゃんの髪よりも濃い色の青い髪

まるで獣を感じさせるような赤い瞳と肩に担いだ真紅の槍を持った男
その男は私を見つけると、口元に笑みを浮かべる

「よう、あんたが俺のマスターか？」

「い・・・・・・・・」

「い？」

「イヤァァァァァァァァァ！！！！！」

「んなっ！？」

私は叫んだ。力の限り悲鳴をあげた
目の前の男が何かを言っているようだが恐怖で何も聞こえない

「簪お嬢様！！今の悲鳴は！？ご無事ですかっ！！」

私の悲鳴を聞いて、更識家のＳＰの人たちが倉庫に駆けつける
その頃には目の前にいた男はどこかへと消えてしまっていた

「へ、変態が・・・槍を持った全身青タイツの変態が・・・」

「何ですって！？ＳＰ０１から本部へ緊急連絡！！！！
倉庫にて簪お嬢様が不審者と遭遇、なお侵入者は全身青タイツで槍を所持
至急、警戒態勢をしいてＳＰの人間は侵入者の捕縛に向かえ！！繰り返す・・」

ＳＰの人に連れられて倉庫から出て、自分の部屋へと向かう

部屋の前でＳＰの人に「部屋で待機していてください」と言われた
私はその言葉に頷くとドアを閉め、鍵をかける。・・・これでひと
まずは安心

だけど、ドアノブを閉めた手を見て私はある違和感に気づいた
自分の右手に変な痣があり、紋章のようなものが描かれているのだ
不思議に思い、自分の手を眺めていると後ろから突然声がした

「おい、マスター。いくらなんでも変態はねぇだろ、変態は」

その声に驚いて振り返った先には倉庫にいたあの変態がいた
どうして！？さっきまでは誰も部屋の中にはいなかったはず・・・・
！！
驚いた私は助けを求めようとドアの鍵を開け、部屋の外へと出よう
とする

「おっと、少しぐらいは人の話を聞けよな」

「・・・ッ！！誰ｋームグッ！？」

「だーから、人の話を聞けって」

「ムーッ、ムーッ！！！！」

だが、男に捕まり助けを呼ぼうとしても口を押さえられてしまった
何とか振りほどこうとするが、男の力が強く振りほどけない

「大人しく話を聞いてくれれば悪いようにはしない
俺はアンタに話したい事があるだけだ。危害を加えるつもりは
ねぇ」

男はそう言うと私を掴んでいた手を放し、両手を上に上げた
・・・どうやら本当に危害を加えるつもりは無いようだがまだ完全には信用できない

「・・・貴方は・・・誰・・・・？」

「まぁ、待て。それも含めて順に説明する
・・・マスター、聖杯戦争って聞いた事があるか？」

男の言葉に私は黙って首を横に振る
それを見た男はため息を吐く。どうやら軽くショックを受けているようだ

「叫ばれた時点でなんとなく気づいてはいたが・・・
よりによってイレギュラーかよ。しかもマスターは小さい嬢ちゃんときた」

その言葉に少しムッとする
初対面の人に訳もわからないままため息を吐かれるのは正直、気分が悪い

「聖杯戦争ってのは7組のマスターとサーヴァントで行われる殺し合いだ
嬢ちゃんは巻き込まれたんだよ。サーヴァント・・・この俺を召喚してな」

「サーヴァント・・マスター・・？」

「ああ、サーヴァントってのは生前に偉業をなした英雄の事でな

そいつらが聖杯戦争のためにあらゆる時代のあらゆる国から呼び出されるんだ」

開いた口が塞がらないというのはこういう事だろう
目の前にいた男の話は常識とはかけ離れている。誰がそんな事を信用するものか
だいたいそれだと自分が過去に死んだ人だと言っているようなものだ

「・・・無理。信じられない」

「まぁ、そうだわな。じゃあ証拠を見せてやるよ」

男はそういうと私の目の前でスゥッと音をたてるように消えた
比喩ではなく本当に消えたのだ。私の目の前で

（どうだマスター、少しは信じる気になったか？）

「・・・・・ッ！？ど、どこにいるのっ！？」

（今は霊体化してる。わかりやすく言うと幽霊状態だな
だからライン・・・まぁ後で説明するが、それを通じて話してる）

幽霊状態って・・・まさか、さっきの話は本当だったの！？
本当は信じたくないがこんなものを見せられた以上、信じないわけにはいかない

「どうだ。少しは信じる気になったか？」

「ふにゃぁっ！？」

いきなり後ろから声をかけられて、変な悲鳴をあげてしまった
男はそんな私を見て笑いながら聖杯戦争について説明してくれた
聖杯戦争における7つのクラスの事。私の手にあらわれた令呪の事
そして自分がランサーのサーヴァントである事・・・

「さて、マスター。お前はこれを聞いてまだ聖杯戦争に参加する気があるのか？」

聖杯戦争。7人のマスターたちによる殺し合い
本当にそれに参加するの？自分が生きるために誰かを殺さなきゃいけないの？
頭の中で色々な感情が渦巻く。気持ちが悪い、これが夢だったらいいのに

「かんちゃ～ん」

そんな時に頭の中に浮かんだのは私の唯一の親友の姿

「ランサー・・・」

「何だ？」

「聖杯戦争って・・・一般人が巻き込まれたら・・・どうするの？」

「記憶を消す・・・だが、たいがいのマスターは見た奴を殺すだろうな」

殺す。そう答えたランサーの言葉に思考が止まる

・・・もし、もし本音や私の周りの誰かが聖杯戦争に巻き込まれたら？
それで誰かが死んでしまう事になったら・・・
私が聖杯戦争に参加すれば守れるかもしれない
だけどそれは同時に本音たちを巻き込む可能性があるわけで・・・
そう考えただけで体が震えた。自分は誰かを守れるのだろうか
大好きなＴＶ番組のヒーローのように大切な人を守れる存在になれるのだろうか
私は・・・本音たちを・・・皆を・・・守りたい

「で、マスター。結局どうするんだ？」

「・・・参加する。でも殺し合いはしない
戦いになっても相手を殺さないし、自分も殺されない・・・・・・ッ！？」

首に真紅の槍が突きつけられる
怖い・・・・怖い、コワイコワイコワイコワイ
でも、これは私にしかできない。お姉ちゃんだって聖杯戦争を知らないだろう
だからこの戦争から皆を守るためには私が戦うしかない
決意を固めた私は恐怖を我慢してランサーの瞳を見つめ返した

「本気で言ってるのか？
そんな甘っちょろいやり方で勝てると思ってるのか、お前」

「・・・私はっ、誰かを守るために戦いたい・・・

殺し合いなんかじゃなくて、友達を、お姉ちゃんを周りの皆を、
・・・守りたい」

「・・・・本気なんだな？」

その言葉に私はランサーの目を見つめたまま頷く
ランサーはそれを見ると静かに目を閉じて、その場に膝をついた

「汝を我がマスターとして認める
我がクラス名はランサー。真名はクー・フーリン
此度の戦争、我が槍に賭けてマスターを勝利へと導こう」

クー・フーリン。ケルト神話の光の御子
興味本位で見た神話の本に載っていた伝説の英雄。その名前を聞いて本当に驚いた
驚いていたけど、顔をあげたランサーが浮かべていた笑みに思わず私も笑ってしまう

「これからよろしくな、マスター」

「・・・よろしく、ランサー」

私の周りの誰も絶対に死なせはしない
たとえ1人でも皆を守ってみせる。絶対に・・・誰も失ったりはしない

この数週間後、もう1組のマスターと出会い同盟を組むのだが・・・
それはまた別のお話

ー　オマケ

「会長、落ち着いて！！ひとまず落ち着いてください！！！！！」

「嫌っ！！！！私の簪ちゃんが更識の家で変態に襲われたって！！
今すぐ簪ちゃんのところにいくのぉぉぉぉ！！！！そして変態を殺すのっ！！！」

「ダダをこねないでください！！それと殺すのは拙いです！！！」

「やだやだーーーーーっ、行くのーーっ！！
今すぐ簪ちゃんのところへいーーーくーーーのーーーっ！！！！！」

「子供かアンタはぁぁぁぁ！！！！！」

「かんちゃん大丈夫かな～」

「見てないで手伝いなさい本音ぇぇぇぇ！！！！！」

「簪ちゃぁぁぁぁぁん！！！！！」

更識妹の憂鬱

ある日の午後、午前の授業も終わり次の授業はＩＳの実習
そのため一夏は次の授業に向かうため更衣室で着替えていた

「しっかし、広すぎるよな・・・更衣室」

一夏は辺りを見回してため息を吐く
ＩＳ学園に男は自分ただ一人。そのため更衣室には一夏しかいないのだ
周りを見ても人が一人もいないというのは寂しいものである
実際にはキャスターが霊体化して傍にいるのだが、見えないのでカウントはしない

「だーれだ」

そんな事を考えていたら突然、後ろから目をふさがれた
・・・こんな事をするのは1人しかいない。全く、誰かにバレたらどうすんだ・・・

「キャスター・・・出てくるのはいいけどさ
もし誰か来たら大変だから大人しくしててくれ・・・」

（ご主人様、勝手に人のせいにしないでください。私は霊体化してますっ！！）

違ったようだ。キャスターから念話で怒られてしまった
よく考えればさっきの声はキャスターとはちょっと違ったような・・・

・・・ってことは誰だ！？

「ブーッ、時間切れ～」

そう言って解放してくれる手の持ち主を確認しようと俺は振り向いた

「・・・・・・簪？」

そこにいたのは俺の同盟相手の薄い青髪の少女
のはずなのだが、いつもと印象が違う。眼鏡もかけてないし
それに・・・・

俺はある一点に視線を移してもう一度、記憶の中の簪を思い出す

思い出せ・・・記憶の中の簪は・・・

ショボーン

そして目の前にいる簪に似ている知らない人は・・・

ボイーン

・・・・・・よし。

「アンタ、簪じゃないなっ！！」

「・・・君、よく人に女心がわからないとかってよく言われない？」

（ご主人様・・・）

ーー

ー　ベキィッ！！！！

（マスター・・・鉛筆折れてんぞ・・・）

「え・・・あれ、おかしいな・・・」

普通に授業を受けていたはずなのに、手に持った鉛筆が突然折れた
どうして？力を入れすぎたのかな
まぁ、それはひとまず置いておくとして・・・

（何でだろう、とてつもなく一夏を殴りたくなった）

なぜかは知らないが一夏に向かう殺意が溢れてきた
今日の授業が終わったら一夏の部屋にでも行こうかなぁ・・・

そう考えながら窓の外を眺める。
今日の１，２組の実習は実弾演習だろうか？アリーナの方から煙がでている
何か一夏が酷い目にあっている気もするが・・・気のせいだろう

午後の授業も終わり、ＩＳ学園の寮に帰った私は一夏の部屋へと向かっていた
・・・心なしかランサーも嬉しそうだ。一夏の部屋ぐらいしか実体化できないもんね

部屋の前に立ち、ドアをノックすると死にそうな顔をした一夏が出てきた
・・・・何があったんだろう

一夏の部屋に入り、ランサーも実体化して椅子に座る
とりあえず私は一夏に何があったのかを聞いてみる事にした

「・・・・・・・というわけなんだ」

疲れた顔をしながら一夏が告げた言葉に私は驚愕した
なんで・・・お姉ちゃんが・・・一夏と・・・？

自分の姉が何をしたいのか理解できない
だけど、全てはあの姉の計算どおりに進んでいるのだろう

だってお姉ちゃんは何でもできる・・・私なんかと違って
可愛いし、頭はいいし、運動できるし、明るいし・・・
正直なところ、私がお姉ちゃんに敵ううものなんて何一つ無い

あるとすればサーヴァント・・・ランサーとと契約している事だが・

・・
でもそれは偶然、契約したランサーの力が凄いのであって私の力じゃない
そこまで考えてさらに気持ちが落ち込んだ
・・・一夏だって私なんかよりお姉ちゃんの方がいいはずだし・・
もし、お姉ちゃんと一夏が仲良くなったら
一夏は私といるよりお姉ちゃんといる事のが多くなるかもしれない
そう考えたら泣きたくなってきた。また私はお姉ちゃんに敵わないのだ
・・・初めて好きになった人まで、お姉ちゃんにとられてしまう
後でランサーに聞いたのだが、それから私は一夏が話しかけてきても「あ・・・」とか「そうだね・・・」しか返事せず、ずっと上の空だったらしい
部屋に帰って寝ようとしてもなかなか寝付けない
お姉ちゃんに一夏がとられちゃう夢を見そうで眠りたくなかった

「あまり眠れなかった・・・」

翌日、私は赤くなった目をこすりながら全校集会へと向かった
全校の生徒が集まるだけの事はあり、流石に圧巻だ

（・・・すげぇな、こりゃ。坊主が羨ましいぜ、ちくしょう）

・・・またナンパでもする気だろうか。このサーヴァントは
ランサーの言葉に呆れていると壇上にお姉ちゃんが立った

その後、自己紹介を終えたお姉ちゃんの後ろに空間投影ディスプレイが現れる
そこに現れたのは一夏の写真だった。・・・・欲しい・・じゃなくて！！

「今年の学園祭では特別ルールを導入するわ！！
その内容は・・・・名づけて、各部対抗・織斑一夏争奪戦っ！！！！
これは学園祭の出し物で1位をとった部活に織斑君を強制入部させるイベントよ
さぁ、これで学園祭へのやる気はでたわね・・・さぁ、頑張っていきましょう」

「「「「「「「「「うぅぅおおおおおおおおおおおおおお！！！！」」」」」」」」

お姉ちゃんの言葉に周りから雄たけびが上がる
・・・え・・・何これ、一夏は・・・・ああ、あれは驚いてる顔だ
どうやらお姉ちゃんの独断らしい
こうして、学園祭での一夏の争奪戦が行われる事が確定した

更識妹の憂鬱（後書き）

学校とバイトが忙しくてなかなか小説を書く時間がとれない・・・
今回は短めです。新しいサーヴァントいつ出そう・・・
この頃、誰を出すか決めたのでサーヴァントを出そうとしたのですが
アイツを出すと確実にギャグになってしまう事に悩んでいる自分です
・・・・・たぶん登場は学園祭になると思われます

狐との日常

「なぁ・・・機嫌直してくれよ。キャスター」

「・・・・・・・・」

俺が楯無先輩から景品宣言されてから数日後の深夜
今、俺がいったい何をしているのかというと

久しぶりに実体化して目の前に座っているキャスターに謝っていた

あれからというもの先輩が俺の部屋に入り浸り
キャスターが実体化できるのが深夜ぐらいしか無くなってしまったのだ

しかも先輩は俺の部屋に泊まることもあるため、その日は深夜すらも実体化できない
そのためキャスターの機嫌は日に日に悪くなっていって今に至るというわけだ

先輩に文句を言ってみても、鍛えるためには波長を合わせなきゃとかで逃げられる
簪に相談してみたら無言で平手打ちをくらうし・・・今思ったら何で殴られたんだ？

「なぁ、キャスターってば
少しぐらいは返事してくれてもいいだろ？」

「・・・・浮気者の旦那様なんてしりません」

ずっとこの調子だ。毎日のように呪うのを止めたり、睨まれたりしてるので正直きつい
何とか許してもらえないとこちらの身がもたない。確実にもたない
明日から中間テストだというのにこんな事をやっていていいのだろうか俺は
・・・赤点、２・３個ですむといいなぁ

「だから本当にごめん！！実体化できないキャスターの気持ちもわかるけどさ
先輩については絶対どうにかして見せるから。だから・・・な？キャスター」

「・・・・・も」

「へ？」

「タ・マ・モッ！！
２人きりの時はそう呼んでくださいって言ってるじゃないですか！！」

・・・そういえばそう言われてたな
まぁ流石に自分の本当の名前を誰からも呼ばれないってキツイもんな

「わかったわかった。・・・・・ごめんな、タマモ」

「まだ許しませんけどねっ！！」

そう言ってタマモはそっぽを向いてしまう。うーむ、どうしたものか・・・

あ、前にタマモが俺に弁当作りたいって言ってたような・・・その時は断ったけど

「そ、そうだ！！タマモ、明日の弁当作ってくれないか？
タマモの料理を食べたらテストが頑張れる気がするんだよ」

「・・・・・・・。」　ピクッ

お、いけるか？

「前に弁当作ってくれるって言ってくれたろ？
実は結構楽しみだったんだよ。タマモの料理食べるの」

「・・・・・・！！」　ピクピクッ

言葉を続けるごとにタマモの耳が動く回数が増えていく。うむ、面白い

「・・・しょ、しょうがないですね
旦那様にそこまで言われたら良妻狐としては頑張らないわけにもいきません」

どうやら上手くいったようだ。心なしか尻尾が左右に揺れている気がする
キッチンに移動したタマモは冷蔵庫の中を覗き込みながら鼻歌を歌っている
・・・よかった、これでようやく眠れる。勉強はまぁ・・・何とかなるだろ

・・・・そしてテスト当日
何とか４時間目の一般科目（必修）までを受けきった俺は机に突っ伏していた
この授業では言語圏に依存するため、教室内には日本人しかいない
・・・いざ、黒髪だけになってみるとすげぇ違和感だ

「織斑君、学食行こうよっ！！」

「たまには私達と食べよ！！」

「そうそう、いつも専用機持ちばっかズルイ」

そして終わった瞬間に女子に囲まれ、いつもなら強制連行されるパターンだ
・・・・だが今日の俺にはタマモが作ってくれた弁当がある
誘ってもらったのに悪いけど、今日は断ろう

「あ、ごめん。今日ｈ「一夏君いるー？」・・・楯無先輩？」

名前を呼ばれ、ドアの方を見てみると楯無先輩が立っていた
その手には何やら重箱五段のような物が握られている

「たまには教室で食べましょ？楽しいわよきっと」

そう言うと俺の机に重箱五段を置いてテキパキと椅子を用意する
その間に他の女子にも声をかけて、あっという間に六人ほどが集まった
楯無先輩はその間に弁当を机に広げて・・・・・おおっ！？

「うわぁ・・・超豪華・・・」

誰かがそう呟いた。そりゃそうだろう
伊勢海老とかホタテの入ってる弁当とか豪華すぎじゃないですか先輩・・・

「一夏君っていっつも学食でしょ？
お姉さんのお弁当好きなだけ食べてもいいわよ」

そう言って俺の前に肉詰めのピーマンを差し出してくる
まぁ、正直言っておいしそうだし、ありがたいんだけど・・・

「あ、すいません。俺も弁当なんで」

そう言って俺はキャスターが作ってくれた弁当箱を先輩に見せる
すると先輩は驚いたような顔をして、弁当箱を見つめていた

「・・・・なんで？」

「いや、何でと言われましても・・・」

「だって一夏君っていっつも学食じゃない
それが何で、よりにもよって今日に限ってお弁当なの
・・・・くっ、リークされた情報が間違っていたとでもいうの
！？」

まぁ、普通なら今日も学食のつもりだったしな
・・・ていうかリークってなんすか。リークって
頭の中で突っ込みを入れながら俺は弁当箱の蓋を開ける

蓋を開けてみるとそこに入っていたのはまず白米
・・・うん、これは基本だしな
次に油揚げと野菜の炒め物
・・・これも結構美味そうだ
その次は油揚げの中にチーズなどをつめオーブンで焼いた洋風の料理
・・・おそらくタマモのオリジナルだろうが、焼けたチーズの匂いが香ばしい
その他はじっくり煮て味付けした油揚げといなりずし
・・・そして最後にたくあんなどの漬物

・・・・うん、なんていうか・・・油揚げばっかりだなオイ
俺の弁当を見た先輩や箒、それに周りの皆も口元が引きつっている
「い、一夏君って油揚げ大好きなのね・・・」
確かに好きですが・・・って、何故に周りの人はメモを取り出してるんだ？
箒も「そうか、では今度イナリ寿司でも・・・・」とか呟いてるし
「そんなのばっかり食べてたら栄養偏るわよ？
それは皆で分けながら食べて、私のおかずでもつまみなさいな」
先輩はそう言って自分の弁当を俺に差し出してくる
俺は思わずその言葉に頷きそうになったが

今朝に自分の部屋で料理を作ってくれていたキャスターを思い出した
・・・そうだな、俺のために作ってくれたんだもんな

「いや、自分の弁当を食べますよ
この料理は何ていうか・・・俺にとって特別なんです」

「何？そんなに好きなの油揚げ」

「え、ええ・・・まあ」

「わかったわ。今度からは油揚げも入れないと・・」

何か作戦を立ててそうな先輩を横目に俺は弁当へと箸をつける
とりあえず俺は炒め物を口に入れるが・・・正直に言おう。凄く美味かった
油揚げばっかりだなと気が滅入っていたが、料理ごとに味が全く違う
それぞれが素材の味をいかしつつ、薄味とはいえど凄く旨味がある
そのおかげで思った以上に箸が進み、俺はすぐに弁当を完食した
弁当を食べてる間も思ったが、タマモって料理が美味いんだな・・・
これなら今度また頼んでみようかななどと思いながら俺は窓の外を眺めた

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーー

あの女がご主人様にお弁当の交換を持ちかけやがった時は

どうしてやろうかと思いましたが・・・それは私の取り越し苦労だったようです

やっぱりご主人様は私の自慢の旦那様です
私の作った料理を特別・・・・だ・な・ん・てっ！！

霊体化してなければご主人様に思いっきり抱きついてるところです
ああ、愛しい旦那様。タマモは自分が消え去るまで貴方についていきましょう

このままずっと旦那様といられればいいのに・・・と願ってしまいました
聖杯戦争が終われば、私と旦那様は離れ離れになっているとわかってはいるのです

ですが、願う事だけは許してほしいのです
できれば・・・このままずっと、旦那様と共に・・・

学園祭開幕・新たなサーヴァント

いよいよやってきた学園祭当日
ちなみにＩＳ学園の学園祭は一般解放はしていない
この学園の生徒が発行した招待券を貰った者のみがこの学園に入れるのだ

だから盛り上がらないのではないか・・・と思っていたのだが
それどころか他の学校すらも追い抜きそうなほどのハイテンションだった

そしてウチのクラスの出し物はラウラの案のご奉仕喫茶
執事とメイドがご奉仕し、お客様に満足してもらおうという店だ
最も執事は俺しかいないのだが・・・

それにしてもこの店、予想以上に大盛況である
店の外にも行列・・・って何なんだろうこの人気は

馬鹿にするわけじゃないけどウチの店って紅茶以外は普通の駄菓子だぞ
何か紅茶はセシリアが監修したので良い物を安価で提供してるらしいが・・・
女子だとやはり紅茶がすきなのだろうか？俺にはあまり違いがわからんけどな

「それにしても初日から人入りすぎだろ・・・
皆そんなに紅茶飲みたいのかよ、他にも面白そうな出し物あったのに」

「あんたねぇ・・それ本気でいってるの？」

思っていた事をそのまま口に出したら目の前にいる鈴にため息を吐かれた

そしてそのまま鈴は注文したポッキーをリスのように頬張っている

ああ、何か可愛いな。小動物みたいな感じで

「鈴・・・お前ってさ」

「ん？」

「なんか可愛いな」

「ブフーーーーーーーーーーッ！！！！」

「うぉっ！！どうしたんだ鈴！！」

鈴が飲んでいたアイスティーを盛大に吹き返した

どうやら鼻とかにも逆流したらしくめっちゃ咳き込んでいる。・・・・

面白い奴だな

「にゃ、にゃによ！！いきなりっ！！！！」

「あ、いやポッキーを食べてる姿がさ・・・」

「か、可愛いってわけ・・・？」

「おう。リスみたいで」

「リスみたいで・・・・ってこのバカァ！！」

ズドム！！と俺の頭にチョップが突き刺さった
ヤバイ・・・結構痛い・・・いやマジで

「はっはっは、何だ？また何かやったのか坊主」

鈴に反論しようとしたが、後ろから聞こえる陽気な声にそれを中断
俺は痛む頭を抑えてため息を吐きながら後ろを振り向いた

「よう！！遊びに来てやったぜ」

「「・・・・・・・・・・。」」

振り向いた先には片手を上げながら笑いかけてくるランサー
それと何故かジト目の簪とキャスターがいた

何故ランサーとキャスターがここにいるのかというとそれには理由がある

ここ数日の間に俺と簪で相談した結果、楯無さんのせいで実体化できないので
その憂さ晴らしにキャスターたちには学園祭で思う存分に羽を伸ばして貰おうという訳だ
外部の人も入るわけだし、そこは招待券を渡せば別に怪しまれない
招待券はどうしたのかというとランサーの分は簪が
キャスターの分はシャルに買い物に付き合うのを条件に招待券を譲ってもらった
ちなみに俺の分はというと弾に郵送した。学園祭に来たいって言ってたし

まぁ、そういう訳でキャスターたちがここにいるわけだが・・・
向こうの方から飛んでくるシャルの視線がもの凄く痛い
ランサーを誘った事に怒っているのだろうか？一応言っておけばよかったな

それにしてもランサーはいつものアロハで簪は制服なのだが・・・
キャスターは何故かロゴ入りのTシャツに下は女物のジーンズといった格好をしている

「キャスター、その服どうしたんだ？」

「ああ、これですか。いつもの格好だと目立ちますし
簪さんに私服をお借りしたんですよ。少しきついですが・・・」

最初は自分の私服という事で顔を赤らめていた簪だったが
「少しきつい」の辺りで急に暗くなった。どこがきついのかは推して知るべし

「そうなのか、それと3人とも注文どうする？」

「俺はコーヒーで頼むわ」

「執事にご褒美セットで」

「・・・わ、私もそれで・・・」

ランサーの注文はいいとしてキャスターと簪は何故よりにもよって
そのメニューを・・・
そのメニューって菓子を俺に食べさせるだけだぞ。金払って

だが注文は自動で厨房に届くので最早断ることすらできなかった
数分後、ラウラが商品をテーブルに持ってきたのだが・・・
視線が怖かった。本当に。むしろ転校初日の視線よりパワーアップしてるような気がした
商品を受け取った簪は顔を赤らめながら俺にポッキーを差し出している
隣ではランサーがニヤニヤと眺め、キャスターは少し不機嫌そうだ

「あ・・・・あ～ん・・・・・」

「あーん」

口の中でポッキーのチョコがとろける。まぁ、普通に美味しいのだが
流石に朝から何本もコレを食べてると流石に飽きてくるな
最初は拷問に近いほど恥ずかしかったのだが、今では餌をもらう雛鳥の心境である
そして簪のポッキーを食べおわり、次はキャスターの番なのだが・・・
何故かキャスターはポッキーの先端を自分の口に入れた
・・・何だ、自分で食べるのか。と安心したがそれは間違いだった

「ハイ、ご主人様」

「・・・・・・。」

先端を口に咥え、その反対を俺の方に向けてくるキャスター
・・・え、まさかコレを食べろと？いやいやいや流石にそれは

というか周りの皆さん。視線が怖いです視線が
具体的にいうと専用機持ちメンバー＋簪さん。何でそんなに怒ってるのでしょうか

それとそのニヤニヤをやめてくれランサー。正直言って腹が立つからいったいどうしようかと悩んでいた俺だが突然、何か違和感のようなものを感じた

「・・・気づいたか？キャスター」

「ええ、来ましたね。まさかこのタイミングで来るとは・・・」

目の前に座っているキャスターとランサーの雰囲気が先程とはガラリと変わった
先程まで俺の目の前で笑っていたのが嘘のようだ
2人がいきなりこんな風になるって事は・・・まさか！！

「キャスター・・・まさか・・・」

「結界に反応がありました
敵のサーヴァントがこの学園内に入ったようです」

「・・・・・・ッ！？」

小声でキャスターから告げられた内容に俺は思わず叫びそうになった
冗談じゃない。もし今ここで戦闘を行ったりしたら確実に被害がでちまう

「不幸中の幸いというか・・・アサシンではないようです
アサシンならもっと気配を隠すはず。それをしないということ

は・・・」

「真っ向勝負のセイバーか次点でライダー・・・・
最悪の場合はバーサーカーってところか、さてどうする？」

「・・・・一夏」

「とりあえず人気の無いところにおびき寄せよう
昼間から仕掛けてくるとは思えないけど、もしもの事があるかもしれない」

方針を決め、行動に移そうとした俺達だが何やら窓の外の方が騒がしいことに気づく
席を立って窓の外を確認すると背にマントを羽織った大男が腕を組んで立っていた
大男は俺と一緒に窓から顔を出したランサーとキャスターを見据えると口元を歪める
そしてゴホン！！と咳払いをすると大きく息を吸い込み・・・吼えた

「そこの2人、サーヴァントと見受けた！！
我が名は征服王イスカンダル！！！！此度はライダーのクラスで呼ばれておる！！
本来ならば戦うのであろうが、聞いたところ今は祭事の最中！！
故に貴様らと死合う事はしないが、今から余はそこへ向かう！！！！
もしそこから逃げ出すのならば征服王の侮蔑を恐れぬものと知れ！！！！」

大男はそう言い放つとマントを翻し、校舎の中へと入ってきた
・・・って本当にここに来るつもりなのか！？・・・っていうか

普通に真名とクラス名を名乗ってたぞ、あのサーヴァント

「な、何を考えてやがりますか！？あの馬鹿なサーヴァントは！！」

「へぇ・・・かの征服王サマかよ。こりゃあ楽しめそうだな」

「イスカンダル・・・って、マケドニアの征服王のイスカンダル・・・？」

後ろを見たらあのサーヴァント行動に三者三様の反応を示していた

俺はというと、これから起こる事に対し不安を隠せないでいたのだった

征服王の凱歌

学園の窓の外にいた大男・・・ライダー
そのライダーが発した言葉により教室の中はざわざわと騒がしくなっていた
やっぱりあんな大男が突然コスプレ同然の格好で現れたらそうなるか・・・必然的に

「え、あのおじさん誰？というか電波？電波なの？」

「っていうか今あの人ここに来るとかいってなかった？」

「ていうか自分の事を自分で征服王って・・・」

「やだ・・・とってもダンディー・・・」

最後の人は少し黙ってようか。うん、それがいい
だがそんな事より今はライダーをどうするか考えないといけない
もし教室なんかで争っては被害は甚大。最悪の場合、誰かが死ぬかもしれない
かといって教室の皆を避難させるか？というとそれも駄目
ここで殺し合いをするから関係者以外は避難してくださいなどと言える訳ないのだ

「一夏・・・どうする？」

「戦わないって言ってたし・・・それに賭けるしかないな
もしもの場合は他の人の避難が最優先だ。それでいいか、キャスター」

「ご主人様がお決めになった事でしたら・・・」

「ランサーも・・・」

「了解だ。もし戦闘になったら俺が戦えばいいな？」

「頼む。避難はキャスターと俺達で何とかするから」

「よし・・・とりあえず・・・ラウラ！！」

俺達から一番距離の近かったラウラを呼び寄せる
ラウラは少しの間、呆然としていたが俺の声が聞こえて小走りに駆け寄ってきた

「い、一夏！！貴様これはどういうことだ！？何だあの大男は！！」

「落ち着け、ひとまず落ち着いて聞いてくれ」

「これが落ち着いてｒ「ラウラ」・・・」

「頼む。もしアイツが暴れたら皆と一緒に逃げてくれ
絶対にＩＳを起動させても戦おうとしないで絶対に逃げてほしいんだ」

「な、何だと！？私に背を向けろというのか！！
いくら私の嫁とはいえ、そこまで言われては私とて・・・」

「おお、おったおった。ここにいたか、聖杯戦争に参加せし猛者

どもよ」

「・・・・・ッ！！」

その言葉と共に教室の入り口からライダーが姿を見せた
全身から放たれるその威圧。その存在感。自分を王と呼ぶだけの事はある
そこにライダーがいるだけでざわめいていた教室が静まり返った

「ラウラ・・・箒たちにもさっき言った事を伝えてくれ」

「だから私は背をむけるなど「早く！！」・・・ッ！！わかった・・・」

俺が怒鳴ると同時に、ラウラがシャルたちの元へと走っていく
それを見送り、再び視線をライダーに戻すと教室内を見渡していた
その後に俺と簪、それにランサーとキャスターを交互に見て
ライダーが来る前に俺達が座っていた席に腰の剣を横に置いてドカッと腰を下ろした

「何をしておる、うぬらは座らんのか？」

「・・・何が目的ですか」

「なに、近くを歩いていたら結界があったものでな
どうせ暇だったのだからこれから争うであろう敵の顔を見に来たのだ
まさかこんな場所に2人もサーヴァントがいるとは思ってもみなかったがなぁ」

「ほう、では貴方は偵察のためだけに自分の真名をさらしたと？」

「そうだ、余は誇るべき己の名を隠すなどという姑息な事はせん

征服王であるが故に雄雄しく闘い、堂々と略奪する。でなければ意味が無い」

「その言葉を信用するとでも？」

笑いながらこちらに問いかけるライダーにキャスターの殺気めいた声がかけられる

その言葉にライダーはふむ。と髭をさわり言葉を発した

「こうして剣を横に置いているというのに、なかなかに思慮深いのう

この学園の結界にその思慮深さ・・・さてはうぬがキャスターかするとそっちのクラスがわからんが、まぁ剣を交えればわかるというもの」

ライダーはそう言うとゆっくりと立ち上がり、横にある剣に手をかけた

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

一方、箒たちはライダーが現れた事により混乱の渦に陥っていた

「ライダー・・・だと・・・・？」

教室の外で叫んだ大男は確かにそう口にした

千冬から聞かされた7つの単語、その一つがまた現れたのだ
さらにこう口にした。征服王イスカンダル、今回はライダーのクラスで呼ばれた。と

その男が教室に入ってきて私は臨海学校でアーチャーと対峙した時を思い出した
今はまだ抑えてはいるが全身から溢れ出る威圧感。そこにいるという存在感
それらがどれをとっても常人とはかけ離れているのだ

「征服王・・・イスカンダル・・ってまさか神話の英雄の・・・」
シャルロットがイスカンダルという言葉に反応し、呆然と口を開く

「シャルロット、あの男について何か知っているのか？」

「うむ。イスカンダルとは遥か遠くにある惑星の事で・・・」

「ラウラ、たぶん宇宙戦艦がいきつく先じゃないと思うわよ」

「何っ！？」

「あ・・・えと、話を戻すけどイスカンダルって言うのは・・・」

「イスカンダル。神話に謳われる略奪を繰り返した征服王
・・・早い話が伝説の人物ってこと。日本で言うと卑弥呼とかみたいなものね」

シャルロットが話を戻そうとしたが
テーブルの下から出てきた楯無先輩によって台詞をとられてしまった

・・・どっから出てくるんだこの人は

「先輩・・・何故そんなところにいらっしゃるんですの・・・？」

「しょうがないのよ・・・一夏君に会いに来たら簪ちゃんがいて思わず

・・・っていうか2人と一緒にいる人たちって誰？私知らないんだけど」

「あー・・・そういえば名字が一緒ですもんね。ご姉妹なんですか？」

「うん。私がお姉ちゃんで簪ちゃんが妹・・・なんだけど

簪ちゃんがこのごろ私に冷たくて、相手してくれなくて、話しかけよｔ（ｒｙ」

何やら先輩が落ち込み始めた。落ち込むなら言わなければいいのにため息を吐き、一夏たちのもとへ視線を戻すと男が剣に手をかけている場面だった

ーー

ライダーが剣に手をかける。俺と簪はそれを見て後ろに飛びのくそしてそれと同時にランサーが槍を、キャスターが呪符をライダーに向かって構えた

「ほう、槍・・・ということはうぬがランサー

そしてそっちの獣娘はやはり余の見立てどおりキャスターであったか」

「「「「・・・・・・」」」」

笑いかけるライダーに対し俺たちは無言、いつでも戦闘体勢にはいれる状態だ
後はここからどうやって皆を避難させるかだが・・・

「そこまでよ？そこの人たち」

この空気を破壊するように見知った声が教室内に響く
声の方に視線を移すと「銃刀法違反」と書かれた扇子を広げた楯無先輩がいた

「お、お姉ちゃん！？」

「こんにちは、簪ちゃん。それと一夏君も」

「せ、先輩なんでここに！？」

「おっと一夏君。それは愚問よ
校内で銃刀法違反なんかされてて生徒会長が見過ごすわけにはいかないでしょ」

楯無さんはランサーたちの持っている武器を指差しながらそう言ったそれは普通なら間違ってはいないのだが、サーヴァント相手にはその行動は間違いだ

「ほう。もしや・・・うぬはこの征服王を止めると言ったのか？」

「そうね。貴方が征服王だろうとこの学園の王は私だもの」

楯無さんはいつものからかうような口調でそう口にした
それはいつもと同じ、相手に対する挑発のようなものだったのかも知れない
だが、明らかにライダーの雰囲気がそれでガラリと変わった
先程までの笑みは顔にはなく、その顔は完全に戦士としての顔つきだ

「貴様がここの王か。では貴様を倒して
手始めにここを征服するとしよう。・・・覇王は二人といらんからな」

ライダーがそう言うと同時に凄まじいほどの殺気がライダーから放たれる
その殺気に教室にいた生徒や廊下の生徒が一斉に気を失っていく
床に倒れる音が無くなる頃には立っているのは俺達と専用機持ちメンバーだけだった
だが、それも立っているだけ。情けなく膝は震え、今すぐここから逃げ出したい気分だ

そして震える楯無さんを見つめながらライダーがゆっくりと剣を抜き・・・

「お姉ちゃ・・・・・・！！」

「・・・・・・ッ！？」

楯無さん目掛けて振り下ろされた

閑話　ワンサマー破戒録偏（前書き）

えー、パソコンの故障により書き溜めしていたデータが吹き飛んだので・・・
とりあえず書き直している間に閑話投稿。わかる人はわかる某アニメのネタです
久々にギャグ書いたので少しテンションがあがりました

閑話　ワンサマー破戒録偏

楯無が一夏に会いに来る様になってから数日後
そのため、落ち着いて実体化もできず
ストレスで我慢の限界がきたキャスターは一夏の部屋で怪しげな物を作っていた

「ふっふっふっ・・・これでご主人様は更に私の虜に・・・」

その手に持っているのはコップに入った紫色の液体
実はコレ、キャスターお手製の呪術薬・・・いわゆる惚れ薬である
もう外を見れば日が昇り、部屋の中にも光が差し込んでいるというのに
不気味に笑うキャスターの周りが暗黒オーラで歪んで見えるのは気のせいだろう

「効き目は3時間程ですが・・・それだけあれば十分です」

あとはコレを飲めば一夏が自分の魅力にメロメロになる筈
あわよくばここで既成事実の一つでも作ろうと計画していたが、ある事に気がついた

「そうだ、もしかしたらご主人様が理性崩壊するかもしれませんし
ここは妻として旦那様のためにしっかりと身を清めておかないと・・・」

キャスターは頭の中で妄想を膨らませながらシャワーへと向かう
そしてその数分後、ようやく一夏が目を覚ました

「・・・シャワーの音・・・・？
キャスター、かな・・いや、先輩かも・・・」
一夏は頭を掻きながらフラフラとキッチンへと向かう
そしてスポーツドリンクを飲もうとして、机に置いてあるコップに気がついた
「・・・ジュースか？まぁいいや、もらっちまおう」
机に置いてあるコップを手に取り、一気に飲み干す
（・・・お、なかなか美味いなこのジュース。色は変だけど）
「あーーーーーーーーーーーーっ！！！！」
「ブフゥーーーーーッ！？な、なんだ！？」
突然の悲鳴に驚き、慌てて振り返ると涙目になったキャスターがいたキャスターは半泣きになりながらも震える指で俺の手の中のコップを指している
（・・・やばい、このジュースってキャスターのだったのか）
そしてそのまま空になったコップを見て、キャスターは俺に詰め寄った
「何で飲んじゃうんですか！？せっかく私が頑張って作ったのにーーっ！！」
「わ、悪かった！！寝ぼけてたんだ、本当にゴメン！！！！」

「もう遅いです！！ご主人様の馬鹿、ご主人様の朴念仁！！ご主人さむぁっ！？」

凄まじい勢いで俺を罵倒し始めたと思ったら顔を赤らめてそのまま停止した

・・・いったいどうしたんだろう？

「どうしたんだキャスター、大丈夫か？」

※　キャスター視点

「どうしたんだ？キャスター、大切な妻がそんなじゃ心配しちまうぜ？」

「ご、ご主人様が・・・メッチャ私好みに仕上がってるぅぅぅぅ！？」

「はい？」

キャスターがいきなり叫んだ事に驚いてジリジリと後退する俺

だが、キャスターはすぐに距離を詰めて俺をそのままベッドに押し倒した

・・・・って、コレはいろいろとマズイ！！

「キャ、キャスター何を・・・」

「心配なさらないでくださいご主人様・・・

授業までの時間、それほど長くないですが1回ぐらいなら・・・

」

俺の腹の上に跨ったキャスターがまだ少し濡れている髪をかきあげる
シャワーによる水滴がまだ髪に残り、熱を帯びた様に頬を赤らめる
キャスター
・・・正直に言おう。ハッキリ言って凄くエロいです

「きゃ、きゃす・・・」

「タマモ・・・です」

言葉を発しようとした俺の唇にタマモの人差し指が触れる
そしてそのままタマモと俺、二人の顔の距離は近づいていき・・・

「・・・・って、んなことできるかぁぁぁぁ！！！！」

「ふぎゃっ！？」

タマモの頭にチョップを入れ、俺はなんとかこの危険な状態から脱出した

「た、叩かれた！？つーか逃げられた！？
マウントから脱出する高等技術をどこで習ったんですか旦那様！？」

「ふ・・・楯無先輩とラウラのおかげで・・・な」

格好よく言ってはいるが実質、凄く格好悪いと思う
その後もベッドの上からブーイングするタマモを背に、俺は着替えを持って部屋を出た

現在の時間はＨＲが始まる３０分前だ。朝飯に行っている暇はないので
少し速いが、教室で待機してる事にしよう。遅刻して千冬姉に怒られるよりはマシだ
そして教室で待っていると最初にシャルがラウラと入ってきた
流石は優等生のシャルだな。いつもこんなに早く登校してるんだろうか

「よ、シャル、ラウラ、おはようさん」

「あれ？一夏どうしたの、今日はやけに早いｎ・・・」

「む、どうしたのだ？私の嫁の顔に何ｋ・・・・」

※シャル視点

「おはよう。今日も綺麗な髪だね・・・シャルロット。ｍｙ ｓｗｅｅｔ ｈｕｎｎｙ」

※ラウラ視点

「今日も何て可愛いんだラウラ。流石は俺の自慢の夫だよ」

「「〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜っ！？」」

何故か普通に挨拶したら２人の頭からボンッと音がしたような気がした

そしてそのまま頬を赤らめて固まる2人。・・・今日の皆はどこかおかしい気がする
その後も他のクラスメイトが続き、箒、セシリアもやってきたのだが・・・

箒の場合

「い、い、い、いちいちちちちちちちちっかかか！？」

「・・・何でそんなにキョドってんだよ」

※箒視点

「どうしたんだい？緊張して、俺に全てをゆだねな箒・・・」

「・・・・・ッ！？」

何故か猛スピードで逃げ出された。箒・・・教室のドアは後で直しておこうな

セシリアの場合

※セシリア視点

「Ｇｏｏｄ　ｍｏｒｎｉｎｇ、お嬢様
よろしければ私と生涯のダンスを共に・・・」

「ーーーーーーーーッ！！」

・・・・・いきなり気絶。凄く幸せそうだったが

・・・で、今はＨＲ中なのだが視線が入学時より酷い事になってる
俺が振り向くと何故か皆が顔を逸らすし・・・いったい俺が何をしたってんだ
目の前でＨＲをしている山田先生でさえも俺をチラチラと見ては視線を逸らしている

授業中、何とかその視線に耐えた俺は何が起きたか原因を考えながら廊下を歩いていた
・・・そして目の前にはこちらに向かって歩いてくる鈴。何か嫌な予感がする

「あ、おはよ。いち・・・・か・・・・？」

※鈴視点

「鈴・・俺のために毎日酢豚を作ってくれないか？」

「やっぱり結婚しろぉぉぉぉ！！！！！」

「はいいいいいいいいい！？」

突然腰に抱きつく鈴。それに驚く俺だが後ろから放たれた殺気に動きが止まった

そして放たれるビーム、刀、実弾、ワイヤー
俺は鈴を抱えながらそれを転がるようにして避けた
何事かと思って顔をあげるとそこにはＩＳを起動した１組専用機持ちメンバーが

「鈴！！貴様・・・わたしの婿に何をしている！！」

「わたくしの恋人に何をなさってらっしゃるのです！！」

「僕の大切な旦那様に何をしてるのさ！！」

「人の嫁に手を出すとは・・・」

「はぁ！？負け惜しみ言ってんじゃないわよ！！一夏は私のよ！！！！」

いや、俺は誰のものでもないぞ！？ていうか早く全員ＩＳをしまえ！！
こういう事を学園内でやってると絶対に・・・

「何をしているか貴様らぁぁぁぁ！！！！」

ほら来たぁぁぁぁ！！！！我が姉、冥王・千冬様が降臨なされたぁぁぁぁ！！！！
殺される、と思った俺だがその予想は外れた。
こちらに向かってくる千冬姉は俺を庇うように目の前に立って叫んだ

「一夏は私のだ！！誰が貴様らなどにやるか！！
もう大丈夫だぞ、お姉ちゃんが絶対に守ってあげるからな」

「千冬姉!?何かおかしいぞ!!どうしたんだいったい!!」

※千冬視点

一夏子供ｖｅｒ「千冬お姉ちゃん、怖かったよ～!!

俺、千冬お姉ちゃんの事・・・大好きだよっ!!」

「ああ、私も大好きだっ!!

さて・・・どこからでもかかってこいや、小娘共がぁっ!!!!

!」

「年増のブラコンは流行りませんよ千冬さん!!」

「引退した叔母様にご自分の年齢をわからせて差し上げますわ!

!」

「いいかげん弟離れしなさいよ!!この目の上のタンコブがぁっ

!!」

「ブラコンすぎるんだよ!!先生は!!

一夏の事は僕に任せておいて・・・ゆっくり眠ってろぉぉぉ!

!!!!」

「いくら教官といえど・・・私の嫁に手を出す事は許さん!!

将来の義姉とはいえ、手加減無用で叩きのめしてくれるわ!!

!!!」

「やれるものなら・・・やってみろぉぉぉぉ!!!!!」

俺はそこまでを見届けると同時に背中を向けてその場から立ち去りました

・・・どうしてかって？ＩＳの攻撃が散乱してプチ戦場みたいになってるからだよ

後ろを振り返らず、俺は必死に逃げ続けた

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

「何か・・・外が騒がしい・・・」

（爆発音とかも聞こえるんだが・・・様子を見にはいかないのか？）

「そうだね・・・少し見に行く・・・」

「簪いいところに！！みんながおかしいんだ！！」

私はランサーの言葉に頷くと様子を見るために廊下に出るするとそこには遠くから走ってくる一夏の姿が見えた・・・のだが

※簪視点

「簪・・・俺は・・・お前が好きだぁぁぁぁ！！
俺はお前だけのヒーローになる・・・だからっ！！
お前は俺だけの・・・ヒロインになれぇぇぇぇぇぇぇぇ！！
！！」

「んなっ！？」

何で！？いきなり告白された！？嬉しい・・・じゃなくて！！
どどどどうしよう！！やっぱり返事した方がいいよね！？
ここはハイ？ＯＫ？Ｙｅｓ？わかりました？不束者ですがよろしくお願いします？
・・・・いったいどういう返事をしたらいいのっ！？

（ら、ランサーどどどどうしよう！？
いったいどうやって返事をしたらいいのかな！？）

（何を言ってんだマスター？
・・・ん？あれはキャスターのマスターの坊ｚッ！？）

※ランサー視点

「駄犬が・・・誰に許しを得て我を見てるんだ？
ああそうか、そんな事も理解できないほど知能が低かったのか
それはすまないな。そんな低能な目ならそこらの狗にでも食わせてしまえ」

「喧嘩売ってやがんのかテメェェェェェェェェェェェ！！！！」

「ぐぶるぉっ！？」

突如、ランサーが実体化して一夏を蹴り飛ばした
わ・・・わたしまだ告白の返事してないのにっ！！

「と、とりあえず保健室に・・・」

そのままその場に倒れる一夏を引きずり保健室へと向かう
ランサーも霊体化して後を着いてきているが、念話で凄く口論になった
私が何で告白してくれた一夏を攻撃したのかと聞けば
「アレのどこが告白だ!?完全に馬鹿にしてきたじゃねぇか!!」
と返されるし

そして保健室に到着。とりあえず一夏をベッドに寝かせる
その時、私の後ろからキャスターが霊体化を解いて声をかけてきた
・・・マズイ。一夏をこんな状態にしたのがバレたら絶対に怒る

「か、簪さん・・・」

「ご、ごめんっ!!実はランサーが・・・」

「すみませんっ!!!!」

何故か謝ろうとしたら先に謝られた。・・・何で?

「な、何でキャスターが謝るの?」

「実は・・・・・」

私はキャスターから一夏がいきなり告白してきた原因を聞かされた

「・・・で、その効果は異性に魅力的に移って同姓からは憎まれる・・・と」

「・・・その通りです」

・・・惚れ薬。おかしいとは思ったけど・・・少し残念
ランサーも思いっきり一夏を蹴り飛ばして気まずいのか、先程から
一言もしゃべらない
キャスターによるともう惚れ薬の効き目は切れてるらしい
一夏・・・今日は厄日だね・・・とため息を吐きながら私は思う
ベッドで眠る一夏の顔はまるで子供のようで私は思わず微笑んで見
つめていた

・・・あと、この数時間後に織斑先生によって
1、2組の専用機持ちメンバーが生徒指導室に連行されたらしい

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーー

「きょ、教官!！あの時の私は何かおかしかったんです!！です
から・・・」

「ほう、あれだけ好き勝手言ってくれたのにまだシラをきるか・・
」

「「ゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメン
n（ry」」

「箒さん、鈴さん!！しっかりしてくださいまし!！!！」

「一夏ぁぁぁぁ!！!！たすけてぇぇぇぇっ!！!！」

「誰が・・・目の上のタンコブな年増のブラコンだぁぁぁぁ！！！！」

「「「「「イヤァァァァァァァァァァ！！？？」」」」」

征服王の帰還

「お姉ちゃ・・・・・っ！！！！」

「・・・・・・・ッ！？」

簪が叫ぶ声と同時に楯無先輩に振り下ろされるライダーの剣
駄目だ。このままでは楯無先輩が死ぬ。聖杯戦争に巻き込まれて死んでしまう

・・・いったい俺は何のために戦うと誓った？

・・・自分の周りの人を守るためじゃなかったのか？

・・・今、目の前で死にそうになってる人がいるのに俺は何をしている

頭の中で言葉を繰り返す。既に俺の体は前に向かって走り出していたそう、やるべき事は決まっている。だが、これで自分は死ぬかもしれない

・・・シヌノハイヤダ。シニタクナイ。イキタイイキタイイキタイ

「ーーーーーーーー」

後ろから誰かの声が聞こえる。だけど足は止めない
あの日誓った事を守るために俺の体は先輩とライダーに向かって走るのみ

走りながらＩＳを部分展開。一瞬だけでいいライダーに隙を作れればそれでいい
その一瞬。それさえあればランサーかキャスターが先輩を守ってくれる

「うぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！！！！」

ライダーもこちらに気づいたのか楯無先輩に振り下ろしていた剣の動きが止まる
そしてその剣が次はこちらに向かって振りぬかれる

まるでスローモーションのように俺に近づいてくるライダーの剣
そしてその剣が俺をもう少しで切り裂こうとした時、後ろから深紅の槍が飛び出した

すぐ傍で鳴り響く金属音。そのすぐ後で襲ってきた衝撃破
吹き飛ぶ俺が視界の端で捕らえたのはライダーと切り結ぶランサーの姿だった

「よくやったな・・・上等だ、坊主！！
征服王さんよ。人の領土でよくもまぁ好き勝手やってくれたな」

「何を言うか、挑んできたのはそちらの小娘だ
勝負を挑まれては征服王たる余がみすみす退くわけにもいくまい」

「ハッ・・そうか、よっ！！！！」

「むぅっ！！」

ランサーが縦横無尽に槍を振るい、ライダーを追い詰める
その一挙手一投足が、その振る舞いが、その雄雄しさが全てにおいて凄まじい
こんなもの現代の闘いではありえない。流石は英霊としかいえない
どうすればあそこまでいけるのだろうか
どうやったらあれだけ強くなれるのだろうか
・・・どうしたら大切な人全員を守れるくらい強くなれるのか
俺は教室内で繰り広げられる2人の闘いにただ見入っていた
しばらくして距離をとるランサーとライダー
だが殺し合いをしている筈の2人は笑っていた
しばらく視線を交差させていた二人だが、ライダーが構えていた剣を鞘に収めた
「どうした・・・続けねぇのか？」
「うぅむ、そうしたいのは山々じゃが・・・
先程から念話でウチの坊主がうるさいのでな。そろそろ帰ろう」
「ここまでされて無事に帰すと思ってるんですか？」
呪布を構えたキャスターの冷たい声が教室に響く
「やめといた方がいいぞ、キャスター
貴様らの宝具はどういうものか知らんが・・・
もしここで余の宝具を使えばこの部屋など吹き飛ぶからな」

諭す様に言い放つライダーにキャスターが舌打ちする

「ではな、ランサーにキャスター。それにそのマスターよ
次にうぬらと交わるときは雌雄を決する時か
はたまた我が軍門にうぬらが下り、轡を並べるときか楽しみにしておるぞ」

そういいながらライダーは霊体化した
おそらくはマスターのところへ帰ったのだろうか

教室内の被害はそこそこに受けたが、誰一人として怪我をしてはいない
・・・不幸中の幸いだったな

俺が安堵の息を吐いていると簪が俺の方に向かって歩いてきた

「ふう・・ひとまず全員無事でよかったなかんｚ「パァン！！！！」・・・し・・・？」

乾いた音が響くと同時に頬に痛みが走る
前を向きなおすと目に涙を溜めた簪が右手を振りぬいていた

「おい、いきなり何すｎ「うるさい！！」・・・ッ！？」

反論しようとする俺だが簪の声によって止められた
というかこれ程までに怒っている簪は今まで見たことがない

「・・・お姉ちゃんを助けてもらった事は・・・感謝してる・・・
本当は・・・助けてくれてありがとうって・・言いたい・・

でも・・・でもっ！！何であんな無茶したの！？
サーヴァントの強さは一夏だってわかってる筈でしょ！！！！！」
そこまで言われて俺はようやく気がついた。簪は・・俺の心配をしてくれていたのだ
本来なら俺はあそこでライダーに斬り殺されていてもおかしくはない
簪もそれを分かっているからこそ、こうして俺に怒ってくれているのだ

「ごめん・・簪・・・ごめん」

「お願いだから・・もうあんな無茶・・・しないで
・・・もう・・・あんなに心配・・・させないで・・・・」

俺の胸に泣きついてきた簪を抱きかかえるようにして頭を撫でる
そうだよな・・俺が無茶したせいで・・・心配かけちゃったんだもんな

とりあえずランサーにもお礼言わないと
・・・どうしたんだランサー。冷や汗を流しながらこっちを見て
ランサーは俺の後ろを指差しながら少しずつ後ろに後退している

「・・・？いったい後ろになにが・・・・」

「ご主人様ー☆いったい何をされているんですかー？
毎度の事とは思いますが少しは自重してくださらないと
わたし・・・そろそろ本気で怒っちゃいますよ。冗談抜きに」

「一夏・・・色々と説明してもらおうか？一から十まで・・・な」
「そうですわ。ゆっくりとお話を聞かせてください」
「無理して言わなくてもいいのよ。無理矢理にでも言わせるから）
はぁと」
「・・・・・・・・」ニコニコ　↑　無言の笑顔
「夫婦の間に隠し事は許さんゆるさんユルサンユルサンユルサン」
「お姉さんも聞きたいなー
そこに人とか簪ちゃんとの事についてと全部・・・」

・・・悪鬼羅刹7人がいました。冗談抜きに。比喩じゃなく
胸の中の簪に助けを求めようとも俺の服をがっちりホールドして離れず
ランサーにいたっては俺を見捨てて霊体化する始末だった
その後、何とか土下座をしまくって許しを得た俺だが
今日の夜、俺の部屋で今日の事についての説明会・・・もとい尋問会の開催が決定した

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9114v/

IS Fate extra

2011年10月7日21時47分発行